

INFINITE • MADROGUE

ホテル仮面

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

IS学園に入学した数少ない男子生徒の内海成明。彼のとある秘密が、IS学園を混沌と変える。

《コウモリ！ 発動機！ エボルマツチ！

Are you ready?》

目次

解説系

エボルト視点のオリキャラ（キャラ崩

壊解説）

1

本編

第ZERO話 転校先で動き出す

6

第一話 歯車の皇帝、起動 | 20

第二話 抵抗するは白い戦士 | 43

第三話 来は恋する龍戦乙女 | 67

第四話 地獄の歯車と狂った悪党

97

第五話 内海の休日 | 134

163 第六話 金と銀の p a t s i e s

解説系

エボルト視点のオリキャラ（キャラ崩壊解説）

n a s c i t a にて

エボルト「そろそろ奴等のデータを、整理しないとな（唐突）。 先ずは……」

名前：内海成明（今作の主人公byホテル）

誕生日は、11月1日のピチピチの16才。父親が葛城忍の研究所で働いていたが行方不明。基本的に感情を表に出さず生真面目でぶっきらぼうな性格。尚、昔は友達と笑いあったり泣いたりするような感情豊かだった模様。過去に妹を失ったトラウマから、全ての女性が女尊男卑に見えてしまい、女性が怖くなってしまったが、数人の友達によって徐々になれてきている模様。難波重工では、ISのコアを完全再現したことで、業績No.1の実力を持つており、会長にも厚い信頼を受けている。無類の甘い物好き。

名前：葛城巧

18才。年若くも篠ノ束に並んで誰もが認める天才物理学者。

過去に、ISを嘲笑されていた束に影響されライダーシステムを世界に公表せず開発

を進めていたが、研究所の同僚に悪魔の科学者としての葛城をでっち上げられ、全世界で指名手配を受ける。ライダーシステムを酷使し、逃走を続ける途中で篠ノ野東に拉致され、ライダーシステムを解析されるがISじゃないことが分かり、同じ境遇の友としてルームシェア（衛星）をしている。尚、内海とは自分が制作した以外のライダーシステムを検知（スクラッシュドライダー）した時から、ライバルとして交友関係をもっている。

名前：織斑春一

内海と同じ16才で織斑一夏の双子の弟。難波重工が経営している難波中学校で内海と知り合う。一年前モンドグロツソに女装して出場して決勝まで登り詰めるが、兄を助けるために試合を放棄し、以降消息なし。

名前：内海秋名

内海の妹で生きていれば15才。過去に内海が作ったISでモンドグロツソ出場を狙うが、行方不明となる

キャラ崩壊

名前：織斑一夏（原作主人公byホテル）

正義感が強く、決めた事には真つ直ぐ取り組む性格。過去に弟を無くしてから、ヒーローに憧れていた弟の代わりに自分が強くなるうとするが、主人公的展開と勘違いからいつも空振り。ISに関しては、学習スピードが早く、反射神経も並外れて良いため、欠陥機でなければ内海を優に越えていた可能性あり。尚、ことあるたびに、内海と喧嘩している。

名前：セシリア・オルコット（原作ホルスタイン2号byホテル）

ベリーロングの金髪碧眼でナイスバディな美女。イギリスの名門貴族のお嬢様で非常にプライドが高い。過去に列車事故に巻き込まれ、蝙蝠人間（ナイトローグ）に助けて貰ったが、両親を助けてくれなかつた腹いせに蝙蝠を嫌っている。内海とは難波重工の工場をオルコット家をスポンサーとして設立する時、知り合う。尚、現在内海にぞつこんの模様。

名前：ラウラ・ボーデヴィツヒ（銀髪ロリ最高！byホテル）

IS配備特殊部隊シユヴァルツェ・ハーゼ（通称：黒ウサギ隊）の隊長。長い銀髪、右目は赤色で左目は金色のオッドアイ。この金目を隠す為に眼帯を着用している。内海とは、ドイツで織斑千冬が、教官として配属した時に難波重工が便乗して難波チルドレンを複数人送り付けた時に知り合う。内海の影響か、仲間の話を良く聞き日本のアニメやヒーロー文化を嗜むが、いつも副隊長に振り回される。

……………まあ、ざつとこんなもんかな《コンコン》……………ん？」

突如閉店と書かれているはずの扉から音がなり、扉が開く

「やあ、エボルト。コーヒー一杯貰える？」

「……………ああ」

現れたのは、白髪で片目が赤い……………そう、内海で言う織斑春一だ

「ズズズ……………ああ、やっぱりエボルトがくれたコーヒーは美味しいね。なんか他の

だと口に合わなくてさ。」

「はいはい、そりやどうも」

「あつ、そういえば何で内海のエボルドライバー調整してあげなかったの？ あそこま

で暴走するとは思わなかったんだけど!!」

「お前なんか教えるかよ。てか、俺のドライバー返せよ。」

「ふふつ、やあーだね!! だってこれ格好いいし」

あー、こいつほんと苦手

「あつ、もちろんエボルト本人も格好いいよ（（＾＾；）」
「お前なんかにはいい使われても、嬉しくねえよ。………飲み終わったんだっただらさつ
さと帰れよ。」

そういうと、奴は余計な一言を残して去っていった。

「わかった、じゃーね。………」

「お兄ちゃん」

本編

第ZERO話 転校先で動き出す

「……は？」

私は今、目が覚めたら難波重工の訓練室にいた。

さつきまでは寝室にいたはずなのに……

「何故私がここに？」

「お兄ちゃん！」

「……！」

叫ばれた方向を見ると、妹の秋名も同じ場所にいた。

なんだろう、この情景をどこかで……

「秋名！、何故ここ」「こつちに来ないで！」……！」

《エゴルドレイン！》

秋名に近づこうとすると、謎の機械音がした。

そうだ、この情景はあの時の……

私が気づいた頃にはもう遅く、歯車だらけのISは秋名に対してその銃の引き金を引

いた

「止めろー！……はっ！」

夢だった……

「またあの夢か……最近多いな。」

私はそう言うと、手元の写真立てを持ってこう言った

「今日も頑張ってくるよ……秋名」

~~~~~

内海視点

「……が I S 学園か……」

私がこれから入学する I S 学園とは、女尊男卑の原因となった I S の操縦できる女性だけが入学できる高校で数多くの男が、「入学さえできればハーレムが待ってる」などと夢に見ているが、私は違う。何故なら！

高校の勉強は教育機関で習ったし、敷地は人口島だから馬鹿みたいに広いし、生活用品は高いし、それに……

「私は女性が嫌いだ!」

「ひっ!」

しまった!、声にでってしまった。 どうしよう。 目の前で女性が驚いて転んでいる

! 声をかけようにも女性だからなくでもかけないと株がまた下がってしまう! 勇気を振り絞って声をかけよう!

「ごめんなさい。大丈夫ですか?」

「あっはい、大丈夫です。……あの〜」

「はい?」

「1-1に転校してきた内海成明さんですか?」

「はい、そうです。……」

「やっぱり! 私、副担任の山田真耶です。 よろしくお願います!」

「よろしくお願います!」

なんだ、先生なら安心だ……良かった

「内海くんは、教室の場所分かりますか?」

やべっ! 忘れた

「すみません、分からないので教えて貰ってもいいですか？」  
「べつに良いですよ。着いてきてください。」

~~~~~

「~~~~~楽しい三年間にしましょうね！」

「シーン」

「おいおい、どこを見ても女じゃないか！・・じゃなくて、なんで先生が話してるのに誰も返事しないんですか！ほらほら先生も涙目になってますし・・」

「それじゃあ皆さん、自己紹介お願いします。」

「はあくそれにしても女性が多いなここで暗い奴を装って関わって来ないようにするか、明るい人を演じて「内海君！」

「はいー！」

「内海成明です。趣味は多少のスポーツで所属は難波重工です 宜しくお願いします。」
「シーン」

「良かったととりあえずこれであんしん

「キャッ」

えっ？

「キヤーー!」

「清楚系でしかもイケメン!」

「難波重工つてことはあのISのコアを完全再現した?!」

「頭もいいし、趣味もスポーツでイケメンなんて完璧じゃない!」

「内海君! 一緒にホテルで朝まで語り明かそう!!」

うるさいな、しかも上司みたいな人も紛れ込んでるし。一発決めときますか…。皆さんありがとうございます。でもそれはISが使えるからであつて、使えなかつたら皆さんも私の事をバカにするんですよね? はあく、これだから女性は…。」

よし、これでみんなも引いたはず!

「病んでる人! 嫌いじゃないわ!」

「罵倒してくる内海君も…。すて、き…。」

ちよつとなんで気絶する人が出てくるんですか!

山田先生! なんとかしてください!

「じゃあ次は織斑くん!」

「はへ?」

「あつ、大声出してごめんなさい、でもあから始まつて今おだから自己紹介してくるかな、駄目かな」

「はっ、はい！ 織斑一夏です、宜しくお願いします。」

おっ、期待できるイケメンですね！

「以上です！」

「ずてーん！」

やっぱり駄目かなあゝあれ？

「一夏さん！前！」

「えっ？」 パアツン！

私がいった頃には遅く、一夏の頭に拳が飛んできた。あの拳骨は痛そうですね．．．

「何すんだよ千冬姉！」 ガン！

二回も．．．

「学校では織斑先生と呼べ！」

さすがにこれには情が沸きますね．．．

「流石にこれはやりすぎじゃないですかね？ 織斑 教官」

「こら！ 内海、お前も教官ではなく先生と言え！」

「分かりました」

私は今日からこんな環境で学校生活を送るのか．．．

(; 且、)

~~~~~

「うーん」

「どうしました？ 織斑君？ 分からないところがあつたら聞いてくださいね？ なんせ私は先生ですから！」

「じゃあ先生！」

「はい！ 織斑君！」

「全部分かりますえん！」

今は授業中、私は驚いている。そう、一夏さんの学力がとほしすぎるのだ。

「そうですか、内海くんはどうですか？」

「全然、むしろ分かりやすいです。」

実際のところ難波重工の教育機関より分かりやすい。来て良かったのかもしれない。

あれ？ 織斑先生が一夏さんに近づいて来てますね

「織斑、お前入学前に渡した冊子はどうした？」

「古い電話帳と間違つて捨てまして グハア！」 スパアツン！

「再発行してやるから、一週間で覚えてこい。」

「いや、あの量はちよつ て「やれといっている」・・・はい」



流石にあの威圧には誰も勝てないですよね……本当に愛せる馬鹿ですねw

~~~~~

一夏視点

「ちよつとよろしくて?」

「ん?」

誰だ?この金髪ドリ r 金髪美人は、さつき見た記憶はあるけど……

「まあ!何なんですか、そのお返事。わたくしに話しかけられただけでも光栄なのに、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

なんか俺怒らせるようなことしたか? まあいいや

「ほお!それは光栄だあ!」

「完全に営めてますわね! 全く、イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を知らないなんて信じられませんわ!」

偉そうだな!、あれ? ちよつと待って!

「あつ、質問良いか?」

「ふ、下々の物の要求に應えるのも貴族の務めですわ。宜しくてよ!」

「……代表候補生って、何?」

「ずてーん!!」

「し、信じられませんか！日本の男性というのは、皆これほど知識に乏しい者なのかしら?!常識ですわよ！常識！」

えっ？ みんな知ってるの？、不味い、このままでは馬鹿と言うレッテルg 「ちよつとどいてくれますか？」 あっ、内海だ

~~~~~

### 内海視点

「なんで此処にしかメ○ツ売ってないんですか・・・」

私、内海は現在一階の自動販売機でしか売ってないメツ○レモンスカッシュを買いに来たのだ

「10本買って置いたので教室に行くまでも飲めるぞ」ニヤニヤ

しかし○ツツを飲みながら帰っていたら秒で帰って来てしまった・・・メ○○つて凄いですね・・・

せつかく教室に着いたのに、これでは席に座れないじゃないですか！ 文句を言わないと、

「ちよつとどいてくれますか？」

「あつはい、つてお兄様?!」

あつ!、道理でみたことある髪型だと思つたら……

「お久しぶりです、…オルコツト様」

「……」

《キーンコーンカーンコーン》

「ふん! またきますわよ一夏さん! 逃げないで下さいね」サツサツサツ!

セシリアさん、一夏さんと何かあつたんでしようか?

「なあ内海」

「何ですか?」

「代表候補生つてなんだ?」

「……」

案外簡単な理由かもしれませぬ……

~~~~~

内海です、今は何だかんだあつて授業が終わり山田先生に言われたとおりには学生寮に向かっています。

なんでも急遽部屋割りを変更してねじ込んだとか。

「1025号室……此処ですか。」トントン

ノックをしてみるが応答がない。

「失礼します」

「誰！」

恐る恐る部屋のなかに入ってみると、奥の机でひたすらプログラム？を打ち込んでいる手を止めて振り向いてきた。

「申し遅れました、私は難波重工所属の内m「あ、サイボーグさん……」違う、それは葛城さんが勝手に付けたあだ名だあ！って、簪さんですか……」

暗くて良く見えないが声とシルエツトで更識さんだとわかった、さて、この人がいると言うことは！

「簪ちゃん！ 入るわよ〜！って、いつぞやのサイボーグくん「貴女も影で私の事をそう呼んでいたんですね」まあまあ、冗談よ、それより、何時になつたら私の事を…お姉さん…と呼ぶになるのかしら？」

待て待て待て！ 今さらつとこの人爆弾発言しましたよ！」

「おつ、お姉ちゃん！」プシュー

「おr、私は生涯結婚するつもりはありません」

「あら、そんな事言っちゃって、魔法使いにでもなるつもり？」

「はい、実験していきまして今のところ魔法の魔の字すら使えません」

「あつ、そう 私此処の学校の生徒会長やってるから何かあったら相談してね」

「分かりました」

「という事で宜しくお願いします。簪さん」

「うん・・・」

私はベットに座り込む、しばらくたったが二人の会話は無い。

「あの、内m《チーカーラーモーターサマーヨーウ》「すみません、ちよつと電話してきます」・・・はい」

~~~~~

「hello! 久しぶり内海君！」

「葛城さん、もう夜です。」

そう、この人があのISを作った篠ノ之束に及ぶ天災マッドサイエンティスト、葛城巧さんだ。今は天災one（束さん）と同居中で居場所は不明

「そうだった、そういえば束さんが、新しいIS作成中だから完成予定のデータ送つとくよ。」

「ありがとうございます。」

「それj『たつくんご飯だよ』 はあーい、それじゃあ内海君！ see you！」  
葛城さんはたまに天才なのか変人なのか分からなくなるときがあるんですよ……  
よつと、これかな新型機は

「白式か……スペックは高いほうだが…ギアス…series…には負けるな……」  
「内海さん……」

「簪さん、何ですか？」

「此処のところ、どうすれば良いですかね？」

「えつと……此処はですねえ……」

『内海は内心こう思った、何故かわからんが難波重工にいたときよりも肩身が狭くな  
く、自由だと……』

だが、そんな平和もすぐに壊される。

## 第一話 歯車の皇帝、起動

《ピロロロ アイガッタビリー ホウジョウエム》ピッ！

「朝から何だよ……」  
「はいもしもし」

「久しぶりだな内海元気にしてるか？」

今、朝の6時に電話をかけて来たのは私の元上司の氷室さん。最近難波重工を辞めてから行方不明になっている

「まあ元氣ですけど……氷室さん今どこにいるんですか？」

「今は中国にいる。ところで本題に入るが、今酔豚の店で目の前で歯をガジガジやりながら写真立てを見ているツインテールの女の子がいて怖いんだが、どうすればいい？」

「どんな女の子ですか?!」

「相手にしてあげない方がいいと思います。じゃあそろそろ学校があるので切ります。」

「なに！お前今学校にi」ピッ！

はあ、氷室さんでdeskworkしてるときは凜々しいのにどうしてこんな変人なんだらう。



「はあ〜」

「内m、サイボーグさんどうしたの？」

あの、簪さん？ 寝ぼけているのは分かりますが、何で内海からサイボーグに言い直したんですか？

「起こしてしまいましたか・・・すいません」

「別にいいよ、内海さん・・・じゃないやサイボーグさんなら」

「何でそんなサイボーグにこだわるんですか・・・」

「えへへ（へーへ）」

はあ〜

「ご飯食べに行きますか？」

~~~~~

「あつ！ 一夏さん」

「おー、内海じゃん！」

食堂に着くと、入口でばったりと一夏さんに会う。その横にはクラスメイトの篠ノ之さんがいた。

「内海、その人誰？」

「ああ、この人は更識簪さんです。ルームメイトで、昔難波重工の仕事で会ったことがあるんですよ。」

「おおー、宜しくな！」

「っ！」ササッ！

「すいません、ちよつと恥ずかしがりやさんで」

「別にいいよ、また会うだろうし！」

「それより、何で一夏さんは簪さんと一緒なんですか？」

「はは、まあ色々あつて・・・日替わり定食お願いします」

「私もそれで」

はは、二人とも仲がいいんですね、定食も同じだし。

「じゃあ私は、シヨートケーキワンホールで。」

「私はチョコの・・・」

「?!?!?」

?!?!?

~~~~~

一時限目、教壇に上がると突然「授業を始める前に言っておく事がある」と切り出した織斑教か、先生。

「いきなりだが織斑、お前には専用機が用意される。」

「専用機？」

教室に一夏さんの素つ頓狂な声が響く。

「そうだ。お前にはデータ収集も兼ねて学園で専用機を用意するそうだ」

織斑先生がそう答えると女子たちが騒ぎだす。

「専用機？一年のこの時期に？」

「つまりそれって政府からの支援が出るって事？」

「凄いな〜私も早く専用機欲しいな〜！」

「そして、この一組のクラス代表を決めておかなければならない。クラス代表というのは読んで字の如く、一年間そのクラス全般を取り仕切ることになる生徒だ、学級委員長と思ってもらっても良いだろう。自薦・他薦どちらでも構わん、誰か我こそはという者は手を挙げろ」

「私は織斑君を推薦します！」

「私も！」

「えっ、俺？」

まあいいでしょう、ブリュンヒルデの弟ですからそれぐらいは・・・

「私は内海君を推薦する！」

「だよね、頭もいいし！」

えっ？みんな私を、私なんかを？！

「千冬ね、織斑先生！、俺辞退します！」

「私も、研究の時間があるので・・・」

「辞退はできません、推薦された以上甘んじて受け入れろ。他に挙手する者はいないのか？」

何ですか・・・難波重工のギアスの調整もあるし、簪さんのISもみてあげないといけませんのに・・・

「納得がいきませんわ！」

「ほう、オルコットか。言ってみろ」

「男をクラス代表にするなど言語道断、いい恥晒しですわ！このクラストップ、いいえ！学年トップのセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか！だいたい文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない事自体が耐え難い苦痛で・・・！」

そう言つて私たちの事を指差す。私は思い出さなくもないことを思い出した・・・

~~~~~

「すました顔してんじや無いわよ！」

「うっ！」

「恨むならあんたの兄貴を恨みな！」

秋名が……何故、こんなに……

「秋名！」

「来ないで！」

《エボルドレイン！》

~~~~~

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ、世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「んなつ?! 美味しい料理もたくさんありますわ! あなた私の祖国を侮辱しますの?！」

あーあ、下らない。嫌な事を思い出させないで下さい

「どうした、内海! お前も言い返してやれよ!」

「はあ?、何で俺が?」

「フフツ! 流石のお兄様も言葉が出ませんよね、何せ私は本当に天さi「下らねえんだ

よ!」バンツ! ひっ!」

俺はそう言い、自分のタブレットを取り出す。

「先生、黒板借ります。」

「あちよっ!」

先生は止めようとするがもう遅い、..私 の怒りはマックスに達していた。

「皆さん見てください、これがオルコットのIS ブルーティアーズです、スペックは確かに今のところ学年一位と言っても過言ではない。」

「やっぱり! 私のブルーと「今のところはな」..えっ!」

「只し、今後用意される織斑君のIS「白式」のデータをご覧下さい。」

「何故だ!何故お前が国家秘密のデータを持っている?!」

うるさいハエが騒いでいるが私は解説を続ける。

「スペックに関しては、遠距離以外はブルーティアーズを上回っている。」

「そんな・・・」

「俺はそんなISを受けとるのか・・・」

「あと、見てもらいたいのはこのデータ。」

私はロックがかかっているデータを開く

「Projectgeas?」

「そう、我々難波重工が開発しているISのデータです。」

「!!」

皆ギアスの性能に驚いた。

「全てのスペックが……白式より上？」

「そうです、そしてこれは私のISのスペックでもある。」

みんな驚いていた、そして一番驚いて噛みついてきたのは、

「そ、そんなの机上の設定ですわ！ 決闘を申し込みます！ 操縦者のスペックが上

回っている事をお兄様にも教えてあげますわ!!」

「別に良いですよ。私こそ貴女の女尊男卑の腐った理論をぶち壊してあげますよ。」

「話は纏まったな。それでは勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑、内海、オル

コットはそれぞれ準備をしておくように、あと内海ちよつとこい！」

~~~~~

「おい！ あのデータはまだ公表されてないはず、何処で手に入れた！」

「とある兎のマッドサイエンティストですよ」

「兎？ と言うことはあいつか！ 少しお灸をそえないとな……」

多分貴女と私の考えてる兎は違うと思うけど

~~~~~

数日後

葛城視点

《ボットン！ チーン》

「出来た！」 ピヨコン

やつと、やつと出来た！ 東さんの協力もあつてやつと……

「どうしたのたつくくん!? あつ、髪が立ってる。」

「聞きたいですか？」

「うん！」

やっぱり食い付いて来た！

「これは、あの憎きハザードトリガー！ を制御出来る最高のアイテム、フルフルラビツトタンクボトルなのです！」

「ホントに!? スゴいじゃん!!」

「そうでしょ、凄いでしょ 最高でしょ 天才でしょ」

そう言い俺はフルフルラビツトタンクボトルにキスをする。

「あつそうだ！ たつくくんこれ見て！」

そう言う東さんは白色のISを押ししてきた。

「これこそ、東さんの最高傑作の一つ！ 「白式」でございませう！」



まさか!、あの白騎士の複製品!

「excellent! 遂に完成したんですね!!」

「たっくんの技術力有ってこそだよ」

「あのく、クロワツサン焼けましたよ」

「はぁーい!」

~~~~~

月曜日

内海だ、今日はクラス代表決定戦当日 最初は一夏さん対オルコットで今一夏さんが
ISを纏いアリーナに出ようとしている。

「一夏さん、頑張つて下さい。」

「おう!」

「白式ってこんな感じなのか……今の俺は、負ける気がしねえ!」

あつ、今の死亡フラグ……

数分後……

結果は一夏さんの自爆でオルコットの勝利、ああ 私の予想外の事が起きた、性能が

高くても操縦者が……

「わりの、内海 俺の性で……」

たくつ……兄弟 なのにあの人とは大違いだ……

「大丈夫ですよ、一夏さんの敵は私が打ちます。」

「頼む、」

そう言い私は、制服のままアリーナに向かった。

~~~~~

「えっ！ 内海君制服?!」

「まさか降参する気?!」

アリーナは、私が出てきたとたんうるさくなつた。答えは単純、私がI Sどころ

か専用スーツすら着ずに出てきたからだ。パツと見、降伏するように見えるだろう。

まあするわけ無いですけど

「流石のお兄様も白式を打ち負かしたのは想定外だったでしょう。」

「はい、想定外でした。」

確かに想定外だった……

「でも私が倒せば良いだけ……」

そう言い私は紫色の歯車のついた銃、..ネビュラスチームガン..と青のギアがついた  
..ギアスギアル..を取り出す」

「何ですのそれは?」

「何って、貴女を倒す力ですよ。」

そう言い、私はネビュラスチームガンにギアスギアルを挿入し、引き金を引いた。

《ギアスカイザー!》

「潤動・・・」

《♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪》

~~~~~

セシリア視点

お兄様が謎の銃の引き金を引くと、銃口から歯車と霧が射出され、お兄様の体にまわりつき霧が晴れると・・・

《gear・control・gear》

お兄様ではなく、全身装甲のISが出てきた。見た目は金属のような歯車だらけで、複眼と追加装甲のような歯車は、私のブルーティアーズと同じように鮮やかな青色。

「お兄様、流石にISのコアを完全再現したとはいえ第一世代で私に挑むのは嘗めすぎですよ!」

私はそう言いスターライトmkⅢのレーザーをお兄様に対して撃った。その場所は爆発を起こし、私は勝利を悟った。

「結局は全身装甲の第1世代といった所でしよう!」

しかし、試合終了のブザーが鳴り響くことはなかった。

「なぜ! 私は勝ったのに!?!」

「気はすみましたか?」

「えっ?」

そこには無傷のお兄様が立っていた。

~~~~~

内海視点

「オルコット様、ハンデはいくつ要りますか?」

私はギアスからしたら、ただの豆粒を撃ってきたような攻撃をしてくるオルコットに問う。

「なっ! 男性相手に要りませんわよ、そんなもの!!」

「分かりました・・・」

私はギアを再挿入し、地面に向かって引き金を引いた。

《ギアスカイザー! ファンキーブレイク!》

「姿が消えた!？」

そう、ギアスの特殊能力の一つ。視界からの削除。

「ぐっ! があ! どこ!、何処にいるんですの!」

相手に見えてない内に確実に弱点をつく。でもこれじゃあ彼女の成長に響きませんね……

「教える訳無いでしょ?」

《ファンキーブレイク!》

私はオルコットの死角に姿を表し、エネルギーを溜めたネビュラスチームガンの引き金を引く

「そこですわね!」

「っ!」

が、気づかれエネルギー砲が避けられる。何で当たってくれないかなあ

「嘗めないで下さい! 行きなさい、ブルーティアーズ!!」

「合計6機……行けますわね。」

そう言い、私は腕から歯車のようなエネルギーを放つ。歯車は起動中の4機どころか起動してない2までも破壊した。

「んっ!これでは……もうっ!インターセプター!」

「遅い！」

「えっ！」

名前呼びで出すなんて、隙がありすぎじゃ無いですか……簡単に打ち落とせますよ。

~~~~~

セシリア視点

何で、何でですの!?!私はお兄様にひどいことは何一つしていません! 何で! 何で!

「お兄様……一つ聞いて良いですか?」

「何ですか? 降伏しますか?」

「いいえ……何で。お兄様は此処まで私を追い詰めるんです?」

「貴女が大切な事を忘れてるからですよ。」

何?、私は何一つ間違ったことは……はっ!

~~~~~

「ねえ、お兄様?」

「はい？」

「何でお兄様は、女性が嫌いなの？」

「そうだな．．．．私は別に女性自体が嫌いな訳じゃない。」

「じゃあ．．．」

「いじめられてたんだよ、女尊男卑の女性たちに」

「何故？」

「妹が強くて、私が弱いからかな？」

「ならば、女尊男卑な女性じゃなければ私はお兄様には嫌われないのですね!!」

「まあ、そうですね．．．．」

「じゃあ約束しますわ！私は男性を差別しません!!」

~~~~~

「私は．．．肝心なことを．．．」

何でこんな大切な事を．．．しかもお兄様に対しても差別してしまった。私は．．．。

そう思っていたらお兄様が、

「じゃあ、これで終わりにしますか？」

「えっ？」

「次の攻撃で私が地に伏せたら、私は降伏します。だからオルコット・・・いや、..セシリアさん.. も本気の攻撃をぶつけて下さい。」

お、お兄様が、あの時の呼び方で・・・

「分かりました！ 受けましょう！」

私のSEも残りわずか・・・お兄様に私の本気を伝えないと！

「はあああ・・・」

私は、最後の武器スターライトmkⅢにフルパワーのエネルギーを溜める。

~~~~~

### 内海視点

あの顔つき、どうやら思い出したようですね。

「じゃあ、これで終わりにしますか？」

「えっ？」

「次の攻撃で私が地に伏せたら、私は降伏します。だからオルコット・・・いや、..セ

シリアさん.. も本気の攻撃を私にぶつけて下さい。」

「分かりました！」

彼女は、やっぱり強くなりますね・・・でも、負けるわけにはいかないのでね



《ギアスカイザー！》

「はああああ……はっ！」

「っ！」

《ファンキーブレイク！》

しまった、0.5秒遅れた！しかし、ギアスのエネルギーは私のミスも関係なくセシリアのエネルギー弾ごとセシリアさんに向かう。

「ぎやああああ!!!」

『勝者！、内海成明！』

「「「わああああ！」「」」」

私が勝ったことにより観客席がうるさくなった。

セシリアは、エネルギー砲が足下に当たった影響か縦に15メートル位吹き飛び、I Sが解除され……待て！解除されたら不味い！

~~~~~

セシリア視点

「ぎやああああ!!!」

私は負けた……しかも大きな力の差で……このまま行けば、私は落ちて……でもこれが罰と考えるのなら……って、あれ？ 地面に落ちないどころか支えられて

る気がs、っってお兄様!?

「お、お兄様!?!、なにを・・・」

「何って危ないからお姫様抱っこで受け止めただけですが・・・」

「恥ずかしいです!／＼／＼／＼ 降ろして下さい!／＼／＼」プシュー

「駄目ですよ、怪我しているんですから、このまま医務室までいきますよ」

「はっ、はい!／＼／＼／＼」プシュー

この時、私は謎の感覚に浸っていた。なんででしょうか?この暖かい感じは。お兄様を思うと、心が暖かくなり、顔が物凄く火照ってくる・・・

「どうかしましたか? 顔が赤いですが・・・」

「あっ、いえ何も・・・／＼／＼」

「?」

そう言うことですか・・・どうやら私は 貴方 を「お兄様」ではなく、「異性」としてしか見れなくなってしまうようです。

くくくくく

ふうくセシリアさんも医務室に運んだし、一夏さんとの戦いに備えますか!あれっ? 何で一夏さん走ってきてるのでs「てめえ!」えっ?

「内海！ 女の子に対してなにひどいことしてんだよ！」

「えっ？ なんのことですか？」

「とぼけんな！ いきなり姿を消したり、武器を撃ち落としたり！ そんなん卑怯者のすることだろ!!」

はっ？ 何を言ってるんだこの人は………やっぱりあの人とは……

~~~~~

「内海君！」

「春一さんじゃ無いですか！ どうしたんですか？」

「僕、やっとモンドクロツソ出場が決定した！」

「ホントに!? やったじゃ無いですか！」

「内海君の… ヘルギアス… のお陰だよ！ 後もう少しで千冬姉さんを守る事が出来るよ  
うになる！」

~~~~~

《pullllllll》

「はい！」

「内海君……」

「春一さん!! どうしたんですか!、いきなり決勝投げ出して!」

やっぱり、貴殿方の性d「知ってるのか!」・・・はっ?

「あいつの居場所知ってるのか? 頼む、教えてくれ!」

はあくこれだから馬鹿は・・・:

「分かりました・・・教えてあげますよ。」

「そうか! 良かったt「私に勝てればね」・・・おい!、教えてくれたっていいだろ!」

「あいにく、私は卑怯者。なんでね、簡単には教えてあげませんよ。とは言え、簡単

じゃ無いですかw。私に勝てばいいのだから。」

「わ、わかったよ! やってやるよ!! お前みたいな卑怯者には、俺は絶対負けなからな

!!!」

結局気付いてなかった・・・彼.. 織斑春一.. は・・・自分達、愚姉兄に

よって壊れたと言うことを・・・

「あーあ、内海を怒らせたら後が怖いのに……まあいいや、兄貴に対して俺、なんとお思つて無いし。」

そう言うと、謎の牙を向いた蛇のような見た目をした仮面と、所々に宇宙に関係するような見た目のアーマーを纏った男は一枚の写真を見てこう言った。

「後もうちよつとで楽に逝かせてあげるよ……千冬姉さん♪」

おまけ、

名前・ギアスカイザー

スペック・カイザーとほぼ同じ

見た目・カイザーの複眼が青くて煙突？みたいな部分がない

第二話 抵抗するは白い戦士

一夏視点

あいつ……春一の居場所を知ってるのか？ 教えてもらわなきゃ！ あいつには……

~~~~~

### 第二回モンドクロツソ決勝戦当日

「俺をどうする気だ！」

「決まってるだろうお、お前のお姉さんを辞退させて弟さんに優勝させて、女尊男卑のこの世の中とおさらばするために連れて来たんだろうが！」

なんなんだよ！ 何で俺がこんな目に……

「兄貴！ ちよつとこれ！」

「ん?!」

『第二回モンドクロツソ優勝者は……織斑春一選手の辞退により、織斑千冬選手です!!』

「なんだと?!」

「なんで! 何で春一が辞退したんだ!?

「ああ! もうつ、イライラすんな! . . . お前ら、こいつ殺せ」

「了解!」

「おいおい! 俺の人生此処で終わりかよ! . . . 最後に五反田食堂の飯、食いたかったな . . . .」

《ブウウウウン! バアーン!》

「なんだ! 何事だ、」

「兄さん!」

《ヘルギアス! ファンキー!》

《♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪》

《excellent!》

「この野郎!」

「フンツ! ハツ!」

「—————」

「春一! どうして此処に?!」

「何って兄さんを助けに来たんだ「夏!」 . . . .」



千冬姉が俺にかけよつて来た。

「大丈夫か？ 怪我はないか！」

「千冬姉……」

「ね、姉さん……」

「なんだ！、鬨いを投げ出したうえに、一夏がこんな状態になつてる中、何処に行つてた  
！」

「おい、千冬姉……喋ろうとするが千冬姉の胸に挟まって口が動かない  
僕は……」

「お前みたいな愚弟は見たくもない！ 直ちにここから立ち去れ！」

「……」

《ブウウウウウン！》

「ぶはっ、おい！ 春一！」

「構うな！ あんな奴に」

「俺の命を救つてくれたんだぞ！ ほつたらかしの出来るわけねえだろ！」

「?!」

俺は春一のバイクを追つて走つたが、追い付ける訳がなかった……

~~~~~

一目でいいんだ……春一に会って謝らないと……

~~~~~

内海だよ、私は今絶対に織斑一夏に勝たなくては行けない……何故なら……  
「春一さん……」

~~~~~

「内海君」

「何ですか？」

「僕、どうすれば良いかな？」

「何がですか？」

「僕、千冬姉が大好きなんだ……」

「知ってます、いつも「千冬姉は……」ってべた褒めじゃないですか」

「でも、千冬姉は僕なんかより一夏兄さんの方が好きみたいなんだよね……僕、流石に兄さんには勝てないよ……」

「そんなんじや勝てるわけ無いじゃ無いですか、もつと明るく考えて……そう

だ！ 第二回モンドグロッソで優勝すれば、振り向いてくれるんじゃないですか？」

「……………そうか！、ブリュンヒルデに近い存在になれば、僕も……………」

~~~~~

『第三回戦！ 織斑VS内海！』

私はいつものスタイルでアリーナまで来た。ちょうど一夏さんも来たところだ…………

「おい、早くIS装着しろよ」

「チツ！」

私はネビュラスチームガンを構える、ギアを挿入せずに…………

「潤動」

《《fever!》》

銃口からは霧だけが噴射され、ギアスのアーマー素体が装着される

「なんだよ、前の歯車一杯のは着けねえのか？」

「貴方の本気に敬意を称し、私も…命…をかけて闘おうと思ひましてね」

「なんだと？」

『試合・・・開始！』

「おうりやあ〜ー！」

意味もなく突っ込んできた。こんなやつ・・・スチームブレードとネビュラスチムガンの錆にすら成りませんよ

「フンツ！」

「グハアツ！」

一夏さんも剣の扱いは上手いが、あくまでもそれは剣道の滑らかな動きであり、私の銃と剣のコンビネーションにはかないませんよ。

「ハッ！ フツ！」

「ウツ！ グハツ！」

今のところは私の方が優勢ですね・・・

「おい!!!」

「んっ？」

おや、箒さんですか、一夏さんにカツでも入れるのk「お前だ！内海！」、はっ？

「一夏は剣で戦ってるんだから剣で戦え！」

ハエが増えたよ・・・たくっ、

《ガトリング！ ファンキーブレイク！》

ガトリングの能力によって連射能力が付与されたネビュラスチームガンで箒の正面のバリアを貫通させた。勿論、本人に当てるつもりは無く、あくまでも脅しだ。

「てめえ！ 箒に当たったたらどうすんだよ！」

「神聖な闘いに泥を塗った罰ですよ」

そう言い私はネビュラスチームガンを投げ捨てる。

「どうゆうつもりだ？」

「おやおや、仮面の中の眼鏡がずれてしまいました」

「話を聞け！」

「油断してたら、巻き込まれますよ？」

「はっ？ ウツ！」

「何ですか？ 折角近接にしたのに、太刀打ちできないんですか？」

「うるせえ！」

そう言い一夏さんは私の懐に入り込んでくる。畏とはしらずに。私はすかさず

懐にスチームブレードを入り込ませ

《エレキスチーム！》

「ウツ！」

切り捨てる

「グアアアアア！」

断末魔を放ち、一夏さんの姿は見えなくなった。勝ちましたかね？

「まだ、だ！」

「はあ、まだ粘ります．．．まさか！」

~~~~~

一夏視点

「グアアアアア！」

まだだ、こんなところで負けたら．．．アイツの意志も、千冬姉も守れねえ！

~~~~~

「兄さん！」

「なんだ？」

「姉さんって、日常的にダメダメだよね？」

「何を今さら、当たり前前だるお〜」

「僕達が支えてあげないとね♪」

「まあ、そうだな」

鬼みてえだけどな

「あとおつ……」

「ん？」

「姉さんは、僕が守れるようになるから！」

「ええ、千冬姉は強いから要らねえんじやねえの？」

「ああもうっ！　そう言う意味じゃ無い！　ホント兄さんこういうこと疎いよね！！」  
「なんだと！」

~~~~~

奴のためにも俺は……強くならなきゃいけないんだよ!!!

その時、不思議なことが起きた!!

「まだ、だ！」

「はあ、まだ粘ります……まさか！」

なんだかしらねえが、セシリアと闘ってたときと同じくらい力がみなぎる！

「エレキスチームの影響でSEの回復ですか……でも、ウツ!!」

それになんかしらねえけど、素早く動ける！

「ハッ！　セイッ！　オリヤア！」

「ウツ！ グハアツ！ グアアアアア！」

これなら、勝てる……俺は雪片式型を見て、こう言う。

「俺は……この刀で、千冬姉の力で！ お前を倒す！」

俺の目線に、零落白夜使用可能という文字が出てきた。こいつが倒せるなら、何でもしてやる！

「零落白夜……発動！」

俺の武器の形が変形した。使ってみればわかる、チャンスは一度だけ！

「いくぞ！ オリヤア！」

俺は、たった一回の攻撃の為に無我夢中でバリアの前で止まっている内海に突っ込む。

《ガン!!!》

当たった！

「かかったな！」

内海が俺の事を触った瞬間、零落白夜が機能停止した。

~~~~~

内海視点



「グアアアアア！」

私は、アリーナのバリアの壁に吹き飛ばされる。遂に覚醒したか……やっばり彼の兄のことはある。

「俺は……この刀で、千冬姉の力で！ お前を倒す！ 零落白夜……発動！」

あの能力さえ……手に入れれば！

「オリヤア！」

《ガン！》

「かかったな！」

「?!」

私はすかさず白式に手を翳す。説明してなかったな……私の今装着している素体、ネビュラギアスは装甲が薄い代わりに、能力は相手の能力の拒否とコピー！だ

「零落白夜が……ウツ！」

すかさず私は一夏さんを蹴り飛ばし、その衝撃で落ちた雪片式型を拾う。

「返……せよ。それは……俺と……姉さんの剣だ……」

「卑怯者つて言うんですか？……そう簡単には守れると思うなよ！」

私は刀を構え、こう言う。

「零落白夜……発動」

「っ?!」

これで終わりにさせていただきます。

「ハアアアア……ハッ!」

「……これだ!」

すかさず、一夏さんも私がさっきの攻撃で落としたスチームブレードで反撃してくるが。

「ガンッ!」

「ガッ!」

スチームブレードは私の頭、雪片式型は一夏の懐に入った。

「オリヤア!」

《《バリッ!》》

「フンッ!」

《《ジャキン!》》

「グアアアアア!!」

私はすかさず切り捨てたが、一夏さんの刃も強く、私の仮面を叩き割った。

『勝者、内海成明!』

「『わああああ!』』』』

私の勝利を知らせるナレーションが鳴り響く。その瞬間、割れた仮面やアーマーの所々からガスが漏れ出す。

「クツッ！ 不味い！」

そう言い私はネビュラスチームガンを見つけ、取ろうとするが、

「うっ！」

くそっ！ 意識が……遠のい……て

バタッ！

~~~~~

千冬視点

「なんだと?!」

何故だ?! 零落白夜は私の暮桜と一夏の白式しか使えないはず……いや、一人いた。…アイツ…も使えた。しかも内海のシステムとほぼ一緒だったな。

~~~~~



「はあ？」

「だってこんなことだって出来る！」

《ヴァルキリー クリエイティブ！ ファンキー！》

その瞬間、昔の私の相棒「雪片」が謎の煙から出てきた。

「嘘……だろ？」

「だから姉さん……お願いがあるんだ。」

「なんだ？」

「次のモンドグロツソ……僕も出て良いかな……」

~~~~~

嫌な物を思い出してしまったな……もう、アイツは弟じゃない、私がそ
うしてしまったから……

「どうかしましたか？」

「いや、ちよつと考え事をしててな。」

「ああ、一夏君、負けちゃった」

「まあ仕方ないだろう・・・あいつも鍛えてやらないと駄目だn「織斑先生！」どうした!?」

「内海君が倒れました！」

「なんだと?!」

~~~~~

「起きて・・・」

ん? なんだ、この声は?

「起きて・・・」

もう少し寝させてくれ・・・

「起きて! お兄ちゃん!!」

.....

ハッ!!

「お兄様!」

「セシリアさん……此所は？」

「此所は医務室だ」

「織斑先生……」

「タイムリミットまで十秒……もう少しで死んでたぞ内海」

「いや待って！ 何でタイムリミットが設けられてるんですか？」

「一体私に何があつたんですか？」

「わかりませんが、急に内海君のＩＳのコア？からタイムリミットが表示されたんですよ」

あく、一応念のために付けておいた心臓が止まる可能性がある時間か……

「うわああん！、お兄様！ 良かったですく!!!」

「ところで私はどんな処置を受けたのですか？」

「ほとんどはセシリアがやった。」

えっ？ セシリアさんそんな事も出来るんですか?!

「主に、心臓の機能を安定させるための心臓マッサージと外傷の治療、気道の確保に、あと……じ……人……／／／」

「人？」

えっ？ まさか…… 私は唇を押さえる。

「人口呼吸は流石にやらせないぞセシリア。」

「ビクッ！」

「されてないんですか？・・・それはヤ「お兄様がしてほしいのならば、私はいつでも！」・・・えっ？（。D。）？」

今セシリアさん、爆弾発言した気がする。

「それより織斑先生、一夏さんは？」

「ああ、織斑なら今別室で寝ている。」

「何で別室なんですか？」

「一夏のもとに一年の生徒全員が特攻してきた・・・もうわかるな」

「はい、処置ができなくなりましたね・・・」

くくくくくくくく

その頃

葛城視点

「じゃあ、その子の特訓をしてあげてたんですか・・・夜も遅いので、それじゃ」《ピッ



！

《ガチャ》

「ただいま……」

東さんが視察から帰って来た。なんか元気なさそう……

「お帰りなさい東さん」たつくくん!! うえええん!」ゑゑゑ? どうしたんですか?」

いきなりタツクルがましてきて泣き出さないで下さいよ……あ、でもちよつと可愛い／／

「私の……私の最高傑作が……うわああん!!」

「もしかして、白式に何かあったんですか?!」

「ヒック、うん……変なギアだらけの、たかが第一世代に負けたんだよおく!」グジュ

「(。D。)??」

あの白式が?、そんなはずはない! あれは俺達…二人…のISだぞ?!

「しかも……ヒック、私達が手塩にかけて復元した零落白夜まで盗られだあ〜! うわああああああん!」

「誰にやられたんですか?! そんな事!」

「内海成明って奴にだよ！（△△）あいつ、今度箒ちゃんにあげる…紅椿 でリベンジなんだよ！ あんな偽物 I S、ぶっ壊して殺る！！！！（\*、□□）ノ！！」

あつ、（。口。：！ 内海君・・・ 御愁傷極！！

~~~~~

その頃、中国にて・・・

《クラंकアツプ・フィニツシユ！》

「ぎやあああああー！」

「どうした・・・そんなのでは、愛する者と戦う前に、俺の後輩に負けてしまふぞ」

「わかっているわよ・・・でもちよつと休憩・・・」

「わかった。」

内海・・・こいつに何かあつたら、頼んだぞ。 それまで俺が鍛える。

「あとささ」

「ん？」

「そのダサイ服。 どうにかならないの？」

「(。D。()?」

~~~~~

後日

「簪さん・・・いますか」

ようやく退院出来たから、やっと部屋に戻れる・・・簪さんのI Sを見てあげなくては

「おゝウツミン、おひさ」

「えっ? 何で本音さんが此処にいるんですか?」

何で? しかも私のベッドに平然と座っている。

「それがですね・・・内海さん、今日から此所は私と本音さんの部屋らしいです。」

えっ?。(。D。( )?」

「おい! 内海はいるか?」

「はい」

「ちよつと着いてこい」

~~~~~

「わああああ・・・キラキラ

「今日からお前の部屋は此処だ。」

「ホントに!? いいんですか?!」

「ああ、しかも一人部屋だから好きに使ってくれ。」

私は、今感激で死にそうだ。何故なら、織斑先生に連れていかれるのは次の寮だと思っていたのだが、なんとこれからの私の部屋は、整備室だということが分かったからだ。よし! これでいつでもギアスの調整も出来るし、簪さんを誘えばISの調整も出来る!、けど……

「しかし、何故急に私を整備室に?」

「いや、学園長から直々にな……なんともお前のISはオリジナルだから調整などはお前自信にやらせようだと。」

「そう言うことですか。学園長にありがとうございますと伝えといてください。」
「分かった、伝えとく。」

~~~~~

「はあく、内海も無理するねえ。たかがあんな小僧に。」

謎の黒い革ジャンを羽織っている男はその見た目から考えられない40代〜50代

位の声でそう言う。

「そろそろ渡してみるのも……いや、あいつの二の舞になつてもらつちや困るからな。見て決めるか。」

そう言うのと箱から、赤と青と金の裝飾が施され、レバーが繋がっている円形の部分が星座盤のような形のドライバート、蝙蝠と発動機の形が彫り込まれたボトルのような物を取り出しながら、片手にコーヒーを持ち、口にいれる。

「頑張れよ。もっと面白いものを見せてくれ……………」

「マズッ！」

おまけ、

名前：ヘルギアス

スペック：ネビュラヘルブロスへヘルギアスへカイザーギアス

見た目：胴体がヘルブロスやバイカイザーのように歯車のようなアーマーが装着され

ているが、仮面はネビュラヘルブロスで、複眼が青。

名前：ネビュラギアス

スペック：ネビュラヘルブロスとほぼ一緒（固有能力は無しとして）

見た目：ネビュラヘルブロスの複眼を青にした感じ

弱点：アーマーやスーツが、破壊されるほどのダメージを受けると、人体に有害物なガスが噴出され、運が悪いと5分のタイムリミットで息を引き取る。（内海は、セシリアによる気道確保によってガスが抜け、助かった。心臓マッサージ？ そんなの知らん

よ（・・・）

### 第三話 来は恋する龍戦乙女

#### 一夏視点

「という事で、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決まりました。あ、一繋がり縁起がいいですね」

「。(。D。)？ 山田先生……俺負けたんですけど？……おかしくね!？」

「いや、俺全敗でしたよね?」

「それは、私が代表を辞退したからですわ!」

俺が素直に疑問を口に出すと、後ろの方の席のセシリアが机を叩いて勢いよく立ち上がる。

「勝負は貴方が負けましたが、私が、貴殿方の国を侮辱してしまった事、そして私はお兄様との約束を反省しまして、一夏さんに譲ることにしましたの。」

「そう言う事だ。認めろ」

「でも、内海が……あれっ?内海は?」

「内海は、…お前のせい…で壊れたISの修理にかかっている。一時間目の時には来るだろう。」

「呼びましたか？」

「速っ?!」

あいつ、IS直してたにしては速すぎだろお!? でもちようどいいわ

「内海! 頼む! クラス代表変わってくれ！」

「織斑、それは無理だ」

「何でだよ! 千冬姉《スパアン!》痛い！」

「織斑先生だ」

「私のISは、まだトライアル段階なのでクラス代表などやってる時間はないですよ」

「えっ? あれでトライアル段階?!」

「まだversion upするの!?!」

「内海君は、何処を指摘してるの・・・」

まじ? トライバルだかトライバルだか知らねえが、それは無いだろ!?!?!

「ずりいぞ!内海!!」

「卑怯者! ですから」

「グッ! なんだと?!」

こいつ、一発殴らねえと気がすまねえ!

「よく教師の前で暴力を振るおうとするな」



《スパアン!!》

「痛っ！ 何すんだよ千冬姉！」

《スパアン!》

「二度も叩いたな！ 親父にも叩かれた事ないのに！」

《スパアン!》

「誰が大佐だ！ てか、まず親父が居ないだろ！」

「(なんだく仲いいんだなあゝ羨ましい!)」

~~~~~

休み時間

内海視点

「ウツミンく♪」

「本音さんじゃ無いですか？ どうしたんですか？」

「今日、オリムピーのクラス代表就任記念パーティーを開くんだけどウツミンも来ないかなあゝつてく♪」

「ああゝ今日は用事があるんですよね．．．まあ、行くつもりは更々無いんですけど。」

「すいません。今日は知り合いの人と会わなければ行けないので参加できません。」

「ええ〜♪。 外出許可はとったの〜♪?」

「はい、取りました。」

「まあ用事が有るなら仕方ないや〜♪ じゃあね〜♪ みんなになんて説明しなきゃいけないんだよ〜・・・」

今なにか聞こえた気がしましたが、気にしないようにしましょう。

~~~~~

「久しぶりだな・・・内海」

「久しぶりどころじゃあ無いですよ。 氷室さん!」

なんなんですか。 急に呼び出して・・・

「早速本題に入るが、内海・・・これをもう一つ用意できないか?」

そう言うと、氷室さんは過去に私が渡したスクラッシュドライバー! を取り出した。

.. 説明しよう! スクラッシュドライバーとは、葛城巧が設計した project b u i l d の集大成。 ボトルの成分をフルに使えるようにゲル状にしたスクラッシュゼリーを使うのだが、フルに使い過ぎて最悪使用者を暴走させる不良品(笑)なのだ詳しいことは Wiki o e d i a とか、 p i o i v とかで調べろク○が! (b y ホテル飯

面) ..

「葛城さんの許可を取らなければいけませんが・・・どうして急に？」

「話せば長いぞ。」

氷室さんから聞いた話をまとめると・・・

・先日話したツインテールの怖い女の子が強くなりたがっていたので、フルボトルを渡して闘って見たら急に強くなったので調べてみたら、ネビュラガスの反応があったから、エボルトさんに調べて貰ったら、ハザードレベルが4・0に達していた。

・ネビュラガスの出所を調べてみたら中国の機関が勝手に運用していたらしい（勿論潰した。）

・師匠として教育していたら情が湧いてしまったので、自分のスクラッシュユドライバーがほしいと言われた時、完全に拒否出来なかった（考えとく的な）

「・・・・・・・・・・」

「頼む・・・内海」

「わかりましたよ・・・丁度データ収集としても丁度良いですし。」

「そうか！」

「でも、葛城さんから許可が出たらですよ！」

貴方に作ったとき、葛城さんから「俺の最高傑作を勝手に作るな！」って怒られたんですから。

《pullllllll》

「もしもし」

「どうしたんだい？ こんな時間に」

「すいません、話があつて……」

「なんだい？ このてえくんさい物理学者の葛城巧に話してみなさい！」

「あのを、スクラツシユドライバーの製作許可が欲しいのですが……」

「なあんだ、そんな事か……まあ、あのときの事は反省してるだろうし、内海君だけ

らしいよ『駄目だよたっくん!!!』

なんかハエが出てきたよ……あつ、兎か

『その内海つて奴、私達の努力を踏みにじったんだよ？ しかも、束さんのISのコアじゃない偽物で!!!』

「ちよつと内海君、待つてもらつて良いかな？」

「はい……」

~~~~~

葛城視点

「駄目だよたつくん！ その内海って奴、私達の努力を踏みにじったんだよ？ しかも、東さんのISのコアじゃない偽物で!!」

カッチーン！ 巧さん怒ったぞ！ こいつ、俺のライバルを馬鹿にしやがったな！

「ちよつと内海君、待っててもらって良いかな？」

「はい……」

「東さん……」

「なに？ 東さん悪いこといってなI《ハザードON!》…えっ？ (。D。)?」

《ガーン！ ピョンピョンピョンピョン ラビット!》

「たつくんどうしたの？ 何で変身を？」

《ガシャン！ ラビット&ラビット!》

《ドンテンカーン ガタガゴットン！ スタンズスターン！ Are you read

y?》

「変身!」

《紅のスピーディージャンパー！ ラビットラビット！ ヤベーイ！ ハエーイ!》

「東さん、これはIS?」

俺は自分の体(ビルド)を指差す。

「違うよ、それはビルド..、仮面ライダービルドでしょ？ 何言ってるのたつくくん！

たつくくんが設計したものは全て..ライダーシステム..に分類すr...あつ！」

「たーばーねー！」

「ごっつ、ごめんたつくくん！ 許して！」

「許さない！」

俺はビルドドライバーのレバーを回す

《ガタガゴットン！ ズタンズターン！ ready go！ ボルテックファイニッ

シュ！》

「オリヤア！」

「うっ、うわあああー！」

俺は束を叩いた.....

ピコピコハンマーで

《ピコッ！》

「言うことを聞かない、調子に乗る子はお仕置きだ！」

「うっ、うわあああああん！ クーちゃん！ たつくくんが叩いたあ〜〜！」

「流石にこれは、束様の自業自得です。巧様が怒るのも無理はありません。そうだそうだ！」

「うわああああああん！ クーちゃんまで束さんをいじめるう〜！」

「調子に乗った兎は何処だあ〜！」

「うえええええん！ ごめんなさ〜い！」

「こらあ！ 待ちなさあ〜い！ 話してる・・・途中でしようがあ〜！」

「ひえええ〜！ 怒った兎に殺される〜！」

くそっ！ こういう時だけ足が早い！

「なんだかんだ言つて楽しんでますよね？ 束様、巧様」

「楽しんでない！」

「はあく、兎の…夫婦 喧嘩も止めて下さい！」

「夫婦じやない！ このままじゃラボが壊れますよ？」・・・それは不味い!!」

ヤバイ、ヒートアップし過ぎた。

~~~~~

その頃内海は

「ハハハハハッ！」

氷室と二人でビデオ通話にして、二兎の兎のじゃれあいを見て笑っていた。

「変わったな……葛城も」

「はい、しばらく見ないうちに変わりましたよ」

「ええっと、ごめん内海君。それでさあ、って！ ビデオ通話になってる……見ました？」

「はい（ああ）」

「はああ……／＼／＼／＼」

おお……葛城さんの照れてる姿初めて見ました……

「まあ、スクラツシユドライバーは作っていいよ。その代わり、ゼリーはこれを使うこと！」

そう言い、葛城さんは氷室さんのと違うウイオーインゼリーののような見た目のドラゴンのマークが、描かれているスクラツシユゼリーを取り出した。

「ありがとうございます。」

「じゃあ、ゼリーは今日中に届けるから、see you！」

《ツーツーツ》

「これで良いですかね？」

「ああ、ありがとうございます。」

あつ、そう言えば……



「ところで、その弟子の名前は？」

ファンリンイン  
「凰鈴音だ、宜しく頼むぞ。」

「わかりました。」

~~~~~

翌日

「隣の2組に中国からの転校生が来たらしいんだよ。しかも、代表候補生なんだって！」

「中国か・・・」

「気になるのか？」

転校生が中国から来た転校生と言う話に一夏さんは反応していた

「ああ、少しな、」

「フンツ！」

それを見て横にいた箒は機嫌が悪くなったが・・・一夏さん気付いてませんね

「お前にそんな事を気にする時間はあるのか？もう少しでクラス対抗戦だろ？」

「そうだったな・・・やるだけ頑張ってみるよ」

「頑張ってみるじゃない！優勝出来るに決まってるだろ！」

ナニイツテルンデスカ？ 剣道しか教えてなくせに

「でもその転校生って中国から来るんでしょ？強いかもね」

「大丈夫だって！専用気持ちでクラス代表なのは1組と4組だけなんだから！
「織斑君頑張って！」

そんなやり取りがクラス中で行き交う。なんでも、クラス代表が勝ったクラスには、
学食の追加料金分であるスイーツの食べ放題の権利が与えられるらしい。私もそれ
が欲しい……

「その情報、古いよー！」

全員がドアの方を向いた

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ると思わない事
ね」

そこには、ツイントールの小柄な少女がいた。彼女が、氷室さんのお弟子さんです
か……

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

「何格好つけてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ!!何てこと言うのよ、アンタは！」

ああ、一夏さん言っちゃったあー……あつ（。口。……！

「おい」

「なによツ！」

《スパアン！》

「嵐、クラスに戻れ！それに入口に立つな、邪魔だ！」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻るか？それとも、」

千冬は再び出席簿を構える。それを見た彼女は……

「わ、分かりました！じゃあ一夏、後でね！逃げないですよ！」

帰りましたか……最近うるさいのしか居ませんね……

「ではHRを始める。織斑、号令!!」

氷室さんのトレーニングに耐えたって事は、それなりのメンタルはありそうですね……まあ織斑先生には敵わないみたいですけど。

~~~~~

三人称視点

「とりあえず、そこをどいてくれ。食券出せないし、普通に邪魔たぞ？」

「う、うるさいわね。分かっているわよ。」

ようやく席につき、語り合う二人。

「それにしても久し振りだな。ちようど一年振りになるか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそたまには怪我病気しなさいよね！」

そんな会話の中、痺れを切らしたのか箒が突っかかる

「一夏！いい加減どういふ関係なのか説明してほしいのだが？まさか！ つつ、付き合ってる訳ではないだろうな!？」

「べ、別に付き合ってる訳じゃないわよ！」

「そうだぞ。なんでそんな話になる？ただの幼馴染みだよ」

「何、睨んでるんだ？」

「別に何でもないわよ！」

一夏が言った「幼馴染み」という言葉に引つ掛かった箒が一夏に問いかける

「… 幼馴染み」

「箒とは入れ違いで転校してきたんだ。小四の終わりに箒が転校したから鈴が転校してきたのは小五の

「初めてだな。ほら、鈴。前に話したことがあったよな？通つてた剣道場の娘さんだよ。」

「ああ…そんな事も言つてたけ？」

そう言ううと鈴は箒に挑発的な視線を送つた

「む・・・」

「初めまして、これからよろしくね。篠ノ之さん？」

「ああ、こちらこそ」

二人共、一夏に關しての恋のライバルだと認識し、視線をぶつけ合う。

「箒がファースト幼馴染みで鈴がセカンド幼馴染みだな」

一夏達から離れた席には内海と簪とセシリアが食事をとっていた。

「あのく、最近の幼馴染みって格の違いとかあるんですかね？」

「私、姉さんと本音しか話したことないからわからない・・・てか、この金髪の人だれ？」

「？」

簪が、セシリアの事を指差す。

「私は、セシリアオルコットでございます。以後お見知りおきを」

「あつ！ ビルドの台詞！ 知ってるのセシリアさん!!」

「まあ、知ってますわよ？ あの二色の色のヒーローですわよね？」

「うん！ ビルドって、あの赤と青の色合いがほんとにいいよね！ スパークリングも

赤と青だし!!!」

「あのく、それよりお二人とも・・・」

「えっ？（んっ？）」

「そんな食事で大丈夫ですか？」

まあ無理もないだろう、さつきから簪がビルドを語りながら食べているのは、アップルパイとエクレア。そして、内海が食べているのはカップケーキ各種だからだ。

「大丈夫だ」キリッ

「問題無い」キリッ

「いや、そういう時は一番いい食事を頼む。では？」

「大丈夫（ry）」

「問題（ry）」

~~~~~

放課後 内海視点

スクラッシュユドライバーも完成したし、ドラゴンゼリーも届きました。後は渡すだ

k 「一夏のばかあ！犬に噛まれて死ねえ！」 e だ . .

「うう」

「なに泣いてるんですか」

「あつ 師匠の部下」

「そんな風に泣いてたら強くなれませんかよ」

「だって……一夏があゝ」グスッ

ヤバイ！　こんなの氷室さんにバレたら殺される！　朝までホテルで殺されてしま
う！

「何かあつたら相談に乗りますよ」

「いいの？」

「はい」

「じゃあ……」

彼女から聞いた話をまとめると

・中学生の時に、一夏に毎日味噌汁を作つてあげると言う一種の告白をもじつて、毎日酢豚を作つてあげると約束（告白）をしたが、当の本人は毎日飯を奢つてくれる位でしか考えていなかつたらしい。

「じゃあ、そんな可哀想な貴方にプレゼントがあります。」

「えっ？」

「明日の放課後アリーナに来てもらえますか？　アポ取つて起きますので。」

「わっ、分かつた……」

~~~~~

氷室視点

あいつ……大丈夫だろうか……

《ブンブンハローユーチューブ》

「氷室だ」

「内海です。」

「あいつの様子はどうか？」

「泣いてます」

「は？」

「泣いてます。」

「内海……お前！」

「泣かせたのはわたしじゃありませんよ。彼の兄です。」

「……明日、見に行くからな……」

「わかりましたよ」

《ツイッター》

「自分の過ちを思い知れ！ フハハハハッ！」

~~~~~


翌日

「今日は新任の教師が二人来てます！」

「氷室幻徳だ。歴史を担当する。これからも宜しく頼む。」

まさか、教師として見に来るとは……しかも……

「俺は石動惣次。家庭科の助手を担当するよ！ 宜しく！」

「「「きやあああああ！」」」

「無口系とお調子者系キタアー!!」

「教師との禁断の愛……嫌いじゃ無いわ！」

「これは、一夏×石動先生 内海×氷室先生だな！」

「いや、一夏×氷室先生 内海×石動先生でしょ！」

「わかってないな〜 一夏×内海×氷室先生×石動先生があるではないか！」

「その手があった！」

「頭いいな！」

何でそんな腐的な話が出てくるんですか、私はともかく三人はまともでしょうに……

「静かにしろ、お前ら！」

「じゃあこの二人の先生に質問したい人！」

「はい！」

「どうぞー！」

「ズバリ！ 好きな女性のタイプは？」

ストレートに聞きますね・・・；

「俺は魔法使いを指しているから、女性等に興味は無い・・・」

「（此処にもいた！）」

まさか、氷室さんも目指していたとは・・・じゃあ何で、女性をホテルに誘うんだ？

「俺は、うゝん・・・そうだなあゝ 強いて言うなら強い人が好き、.. 世界.. 強い女性がい！」

へえゝ.. エボルト.. さんそう言う女性が好きなんですネ.. つて!?

「じゃあ織斑先生は!？」

やっぱり聞く人いるかあー

「ドストライクだよ！」

「「きやあああああ！」」

「千冬様に春が！」

「愛しの千冬様が・・・あー！！！！」

「嘘だ!!!」

「ウソダンドドコドーン！」

「此所は素直に千冬様の幸せを祈りましょう」

「「お前天才か?!」」

「うるさい！ 静かにしろ！」

~~~~~

「おい内海！」

「何ですか石動先生w」

「笑うなよ！ これでも大変だったんだからな……後、これやるよ」

そう言うと、石動さんは紫色の蝙蝠が彫り込まれたフルボトルを渡してきた。

「有難うございます」

「トランスチームガンでも使えるから、じゃっ、Ciao！」

~~~~~

放課後

「で、プレゼントってなに？」

早速聞いてきましたね。

「これです」《ガチャ》

「っ!? これは・・・師匠の・・・」

「今日アリーナに呼んだ理由は、これのテストを行いたかったからです。」

そう言いながら私はネビュラスチームガンに酷似したトランスチームガンを取り出し、さつきも渡されたコウモリフルボトルを挿入する。

《bat! 〰〰〰〰〰〰〰〰》

「蒸血」

《ミスト・マッチ! bat・ba・bat・・・ファイアー!》

「使ってみてください」

「分かったわ・・・えっと・・・」

戸惑ってますね・・・

「ベルトを装着」

「わかっているわよ! 先ずは、ベルトを巻く!」

スクラッシュドライバーからベルトがオートで装着される

「次にゼリーの蓋を正面に」

「ゼリーの蓋を正面・・・に」《シャキン!》

「後は装着してレバーを倒すだけです」

「ゼリーを挿入して……《ドラゴンゼリー!》鳴った!……後はレバーを倒すだけ……」
《バリバリバリバリ》

「きやあああああ!」

彼女がレバーを倒した瞬間、体が電流が走った。

そんな馬鹿な! ハザードレベルは足りてるはず!?

「てめえ! 鈴になにしてんだあ〜!」

「っ!?!」

~~~~~

### 一夏視点

「なんか鈴が、急に冷たくなっただけで俺何かしたか?」

「きやあああああ!」

「あの声は!?!」

アリーナから、鈴の悲鳴が聞こえた。

「鈴! 大丈夫か!」

なんだよあれ! 何で鈴に電流が流れてんだよ! あの黒い奴がやったのか!?

「てめえ!」

俺は白式を起動し、黒い化け物に突っ込む。

「鈴になにしてんだあ！」

「っ!？」

《《ガン!》》

よし! 当たった

「ちよつと……なにしに来たの! バカ……一夏……」

「何つて、鈴を助けに来たに決まってるだろ?!」

「実験の邪魔だ! 退け！」

「鈴に何をするつもりだ！」

くそっ! あいつ声変えてやがる! 誰かわかんねえ

「貴様に関係はないだろう」

「ふざけんな! 鈴は俺の幼馴染みだ! オリヤア！」

「いい加減にしてよ! なにしやしやりでてんのよ! このバカ一夏!」

「えっ?!」

鈴の電流が増したぞ!

「おい! 無理すんな！」

「あんたのせいよ! ……ふざけんなあ!」

そう言いながら鈴は、腰に巻かれたベルトのレバーを倒した。

「変身！」

《潰れる！ 流れる！ 溢れ出る！》

「鈴何やってんだ！ 離れろ！」

《ドラゴン in クローズチャージ！ プルアア！》

「うおおおお！」

なんなんだよ．．．鈴の回りにコップみたいのが出来て、変な液体が入って、圧縮されたかと思ったら、鈴が変なんになってる。なんなんだよ本当に！

くくくくくく

内海視点

ハザードレベル4. 2. . . 不味い！ 暴走する！

「あんたいい加減にしてよ！」

《ガン！》

「うっ！」

「私の気持ちなんて分からないくせに！」《ガン！》

「うっ！ なんだよ！」

「何が「買い物に付き合うんだろ？」よ！何が「間違えたのかなあ？」よっ！」「ガン！」

「グハア！俺お前にそんな事いった覚えねえよ！」

「うるさいうるさい！私の感情が押さえられないのよ！」

《《シングル！ シングルブレイク！》》

「やめろおー！」

「自我を取り戻せ！」

私は彼女のツインブレイカーに当たる直前に、スクラツシユドライバーに挿入されたドラゴンゼリーを引っこ抜く。

「何すんのy・・・うっ！」《《シユイイン！》》

「鈴！」

「一夏・・・私、どうしたの？」

「大丈夫か？ しっかりしろ！」

手当てなどは、一夏さんに任せますかね

「おい！」

「なんだ？」

「鈴に何をするつもりだったんだよ!?!」

はあくさつきもいったのに



「おや、仮面の中の眼鏡がずれてしまいましたね。」

「話を聞け！ オリヤア！」

だるいんですけど……あつ！

「いい加減にしろ！」

「ちつ、千冬姉………」

私はずらかりますか……《シユーー》

~~~~~

??? 視点

「へえ、鈴さんもハザードレベル高いんだあ」

どうせなら千冬姉ならよかつたなあ、戦う口実になるし。でもあの雑魚じゃなあ

「そろそろ顔だそうかなw 姉さんがいなければ僕が入学してたし♪」

《ヘルギアス！》

「内海君、元気にしてるかな」

《ファンキーー！》

「潤動♪」

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

《excellent!》

「秋名さんの分も、頑張らないとね!」

「おい! そこでは何をしてる!?!」

ああ〜見られちゃった。めんどくさいしこれで片付けよ。

俺は、声がした方を

向いて刺々しい石化トリガー状の物のスイッチを押す

《エゴルドレイン!》

「なんだそれh、グツ、グアアアアア!」

「エネルギーも! 一人の命! 位じゃ溜まらなくなってきたなあ〜」

~~~~~

内海視点

昨日は大変だった・・・何でって?

雪平二式の攻撃で腕を怪我してしまいました

し、鈴さんに関しての説明で織斑先生が、私の名前を出してしまったせいで、一夏さんが部屋に乗り込んでくるし、スクラッシュドライバーのデータを取るために鈴音さんを呼んでたら「また鈴に何をするつもりだ!」って殴られましたし、鈴さんと一夏さんが喧嘩し始めて、鈴さんがスクラッシュドライバーをISで一夏さんごと吹き飛ばしちゃ

いましたし、(ドライバーはランチ部分の破損とライダーシステムの展開が不能、使えたとしてもツインブレイカーの展開とゼリーの噴出だけ)・・・はあく・・・

「どうしたの?内海君♪」

「あつ、エボルトさん・・・」

「この学校でエボルトは禁句だ! (エボルトボイス) 石動先生と呼んでくれるかな♪  
で、どうしたの?浮かない顔して」

「いや、自分の不注意で発明品が壊れてしまっただけですよ・・・」

「そうなんだ・・・あと、関係ないけど鈴音、しばらくスクラッシュユドライダー使い  
こなせないよw」

私の悩みを聞いてくれない上に、彼女へのダメ出しですか・・・

「あの怒りに任せて変身するのは、ライダーシステムからしては、暴走してくださいって  
言ってるようなものだからね。丁度よかったんじゃない? スクラッシュユドライダー  
壊れて♪」

「そうですね・・・氷室さんにはその事話したんですか?」

「まあね♪ それと、近々あいつ来るかもよ・・・」

「来てくれたらありがたいですね・・・まともだったら・・・」

「そんな君に、これあげるよ♪」

そう言うと、エボル・石動先生は、赤い色の発動機が彫り込まれたフルボトルを出した。

「じゃ、Ciao!」

この時、エボルトさんの預言が当たると内海は微塵も思っていなかった……



「お兄……様？」

「……………」

簪や、セシリアも恐怖半分心配半分な顔で呼ぶが、内海は気にもとめず、レバーを回し続ける。そして、ドライバーからパイプのような物が乱雑に内海の体を囲む。

そして……………」

「変身！」

《バット！・エンジン！・フツハツハツハツ！》

そのパイプは内海の体を包み込み、ドライバーから笑い声が聞こえると、そこには……………」

「マッドローグ！　ちゃんと僕の敵出きるじゃん♪」

ヘルギアスによるとマッドローグが立っていた。見た目はほとんどナイトローグ

の白と紫に塗り替えたような感じだが、所々違うところがある。

「フハハハハッ！」

〈数時間前〉

「なんだよこいつら！」

「しぶといわね！」

そこには謎のI Sと、人形のロボット達と戦っている一夏と鈴の姿があった。何故そうなっているかと言うと、一夏と鈴のクラス代表戦の途中に謎のI Sがバリアを破り、そこからロボットが次々と乱入してきたのだ。

「ああ！もう！ こうなったら！」《スクラツシユドライバー！》

「おい、使えるのかそれ？」

「やってみるしかないでしょ！」《ドラゴンゼリー！》

《ツインブレイカー！》

「よし！」

「使えんのかよ……」

鈴が壊れたスクラツシユドライバーを装着し、ドラゴンゼリーを挿入すると、I Sの上からツインブレイカーが装着された。

《シングル！ ツイン！ ツインブレイク！》

「オリヤア！」

《ドカアーン!》

鈴は成り行きで、ドラゴンフルボトルとドラゴンゼリーをツインブレイカーに刺し、ツインブレイクをかました。数十体は倒せたが、まだまだいる。

「どんだけいるんだよ!」

「嵐、大丈夫か!」

《danger ♪♪♪♪》

「師匠!」

《クロコダイル!》

「変身」

《割れる!・喰われる!・砕け散る!・クロコダイルinローグ! オウラア!》

「氷室先生!? 何ですかそれ」

「仮面ライダーローグ……内海からもらった物だ」

「くそっ!また内海かよ!」《ガン!》

氷室も加戦し、一夏はやくくそのようにISと戦っている。

「内海、このガーディアンの詳細は?」

「このガーディアンは、難波重工製とは違い、耐久力が低いようですが、かなり量は多く作れるみたいで、馬鹿みたいに増援が来ます。気を付けて下さい!」



「てか！ 何で内海は戦闘に参加しねえんだよ!？」

「私が命令した。」

「千冬姉?・・・どうして!？」

「お前が怪我をさせたからだろ!」

「確かに・・・」

そう言いつつも、ガーディアンの量もどんどん減ってきている。増援も来なくなつた。何故なら・・・<

~~~~~

葛城視点

《ready! go! ボルテックファイニッシュ!》

「フツ! ハアアア!」

《バアーン!》

この俺、葛城巧が大元を倒したからだよ! つて何を考えてるんだろう俺?

「それより、内海君の所へ！」

《タカ！ ガトリング！ ベストマッチ！》

《♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪》

「ビルドアップ！」

《天空の暴れん坊！ ホークガトリング！ イエーイ！》

~~~~~

一夏視点

「くそっ！ 固いんだよ！」《ガン！》

今、俺はこの目の前にいる変なISと戦っている。なんか知らないけど、妙に固いんだよ動きが！ 人間じゃ無いみたいn………待てよ？

「山田先生！」

「はいっ?!」

「このIS、人間入ってますか?!」

「なに言ってるのよ！ ISは人が乗らないと操縦できないでしょ！」

でも、変に動きが人間らしくない。強いて言うなら内海より動きがカクカクしてる  
「出ました！ 生命反応は．．．．．ありません!？」

「それなら零落白夜が有効だ!」

「でもSEが．．．」

「そうだけど．．．．ガハッ!」

くそつ、油断した! あいつ、エネルギーを溜めてやがる．．．早く逃げn待て、雪片二型は?

《チャージ完了．．．》

不味い! あれを食らったら．．．

『一夏! 男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする!』

あれ箒か? おいおいISが箒の方向いて撃とうとしてやがる!?

《標的変更、発射》

「止めろー!」

《ドカアーン!》

俺は止めようとしたが、間に合わない。エネルギー弾は無慈悲にも箒のいた場所に直撃した。

「箒ー!」

そんな、箒が? . . . . .

《ファンキー!》

~~~~~

箒視点

「一夏が押されてる ?」

くそつ、このままでは一夏が 私にもなにか?!

「放送席?」

私はふと放送席を見た あそこに行けばあの I S の隙が作れる!

「なんだよ君は!」

「早く避難しろ!」

「うるさい!」《ドン! ガン!》

「ウツ!」

「グハア!」

よし、後は『ガハッ!』一夏!?

《チャージ完了》

このままでは一夏が……そうだ、私にISの注意を向けさせれば！
「一夏！ 男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする！」

《標的変更、発射》

これで一夏は無事だ……後は頼んだぞ！

「止めろー！」

《ドカアーン！》

……何故だ!? 何故飛んでこない? そう思い目を開けると……

《ファンキー!》

《♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪》

《excellent!》

そこには見覚えのある、内海とは違うISを纏ったものがいた。

~~~~~

一夏視点

《♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪》

《excellent!》

そこには、絶対いない筈の春一のISを纏った奴がいた。

「流石に友達を殺されるのは、僕も黙っちゃいないよ!」

「春一……なのか?」

「違うけど?」

違う? そんなわけない! 声も、雰囲気も、ISも! 全て春一と一緒だ! つて、

なにあいつ俺の剣とってんだよ!

「それ俺の剣だろ! 返せ!」

「使いこなせてないくせに? 笑っちゃうよ!」

《ヴァルキリー! クリエイティブ! ファンキー!》

「?!」

奴が変な齒車を、変な銃に入れて、引き金を引いた瞬間、千冬姉が使ってた雪片が出

てきた。

「剣はこうやって使うんだ……零落白夜発動」

「っ?!」

おかしい! 零落白夜は俺と千冬姉しか使えないはず!? しかも二刀流?!

《ターゲット確認・・・排j「させないよ♪」》

《ガン！ バリン！ グシヤリ！》

「弱すぎんだよ・・・機械じゃ・・・」

ほんとにあいつなにもんなんだ?! あの無人機を、10秒もかけずに倒しやがった・・・

~~~~~

千冬視点

「なんだあいつは!？」

春一と同じIS!?! しかも、零落白夜を二刀流で発動するなんて・・・並のISならすぐにエネルギーが切れるはずだ・・・

「あのISには生命反応があります! しかしデータベースから確認しても誰かは判断出来ませんでした・・・」

「大丈夫だ山田君。それより心配なのは・・・」

もしあのISが白式等のコアを狙ってるとしたら・・・

「大変だ！ 織斑先生！」

「どうしたんですか、石動先生」

「内海君が勝手に出動した！」

「なんだって?!」

「お兄様が?! 織斑先生、私にも出動許可を！」

「待て！ オマエまでいったら場が混乱する！ 教師陣が行くまで待て！」

「誰一人いつてないじゃないですよ！」

「おい！」

くそ！このままでは収集がつかん！

くくくくくくく

内海視点

あのヘルギアス、あの喋り方、今の戦闘スタイル、完全に…今の…あの人だ！

《ギアスカイザー！》

「潤動！」

《ファンキー！》

《♪♪♪♪ gears・control・gear》

私はピットを走り抜け、ヘルギアスに斬りかかる

「ハア！」《ガン！》

「おお、お出迎え有難う内海君……でもこんなじゃ」《ガン！》

「ウツ!!」

「今の僕には傷一つ付けられないよw」

くそっ！確かにリミッターを付けてないヘルギアスはギアスよりもスペックに差がある！　まて！　夏さんが殴りかかてる！

「辞めろ！よせ！」

「オリヤア！」《ガン！》

「なに？　邪魔なだけで」《ヘルギアス！　ファンキーブレイク！》

「グアアアアア!!」

「なにしてんですか！」

「こいつ……春一なのに、自分の事を否定しやがった。　どんなにいじめてようが……それをするのは、本当の卑怯者のすることだ！」

　　どういふことだ？　彼はどうしてそんな事を言える?!

「自分で言ったことだろ！　春一!!!」

「そう言う事か……」

「だからそんなん覚えてないよ！」《ガチャ》

不味い！ 一夏さんのSEは半分切ってる！通常弾でもネビュラスチームガンの攻撃を喰らったなら！私はギアスの最高出力で走る

《スバァーン！》

「グハア！」

「内海……どうして……」

「彼に罪を着せたくないからですよ……分かったら離れて下さい」

「嫌だ！俺はあいつをぶっ飛ばさないと気がすまない！」

「そんなこと言ってる暇があるなら僕と戦ってよ！」

《ヒュン！ヒュン！》

「くそつ！ 一夏さん、お願いします！」

「織斑！ 一旦避難しろ！」

「千冬姉、何で！」

「目を覚ませ！あいつは春一じゃない！ただの屑なIS乗りだ！」

「……………」

「クッ！」

織斑先生に言われると、一夏さんはちゃんと離れた

「内海君だけで僕の相手が務まるのかな？」

「何とかしますよ……ハッ！ハッ！」《バン！バン！》

「そうだよ！それが面白い！」《カン！カン！》《ガン！》

「ウツ！くそ！」

私はネビュラスチームガンで彼を撃つが、ヘルギアスは防御、近接特化の為、殴られる。私はスチームブレードで斬りかかるが、

《ガン！》「そんだけ？」《バン！》

「グハア！」

このように、歯が立たずゼロ距離射撃をもろに食らう。私は後方に吹き飛ぶ。

「ほらほら！ もつと僕を楽し《カン！》……ん？」

「お兄様！」《バン！バン！》

「セシリア！ 右斜め45度と左に53度！」

「分かりましたわ！」

「セシリアさんに簪さん!?何故来たんですか?!」

「内海君が危ないから……頂点から32度！」

「はい！」《バン！》

止めろ……早く逃げて……

「君達の攻撃楽しくない」《カン！カン！》

「何で効かないんですの!？」

「怯まないで！ 下から22度！」

「わ、分かりましたわ！」

「撃ち所はいいのに、威力で台無しw出直して来なさあ〜い♪!」

そういった瞬間彼は、両手に謎のエネルギーを溜める。 おかしい！ そんな機能はヘルギアスに搭載してない！

《ドカアーン！》《ドカアーン！》

「ウワアアア！」

「キャアアア！」

「セシリアさん！ 簪さん！」

「他のはガーディアンで手一杯みたいだし、君だけだよ？」

私の性で……私が、ギアスの調整を怠っていたから……エボルトさんの言っていた事を聞かなかったから……

「ウワアアアアア!!!」

「そうだよ！ その調子だよ！」

私は殴る。無我夢中で殴る。馬乗りにもなつて殴つた。けど……

「ハザードレベル4。5……やっぱりうつとうしい！」《ガン！》

「グアアアアア！」

「〔内海（さん）（お兄様）!!!〕」

やっぱり、ヘルギアスしかも謎の力がある彼には勝てない。 たつた一回のエネルギー

ギー弾擬きで私はギアスカイザーを解除された。

「ちよつとは楽しめたかな……じゃあ君が持つてるフルボトル貰おうか♪」

もうだめだ……今の彼には、誰も勝てない……例えブリュンヒルデだろうが……

「内海君！」

「石動……先生……」

「これを使つて！」

「っ!？」

エボルトさんは、私に1つのドライバーを投げてきた。ビルドドライバーでもスクラッシュドライバーでもない。形こそはビルドドライバーとにているが赤の成型色に金と青の装飾が施されている。エボルトドライバー……。確かに使いこなせれば……

「内海君……。すごいじゃん！それ使えんの!? じゃあさつさと使つてよ!♪」

「内海……」

「・・・・・・・・」

私は、レバーを回し続ける。彼女らを守るために。ドライバーからパイプのよ
うな物が乱雑に内海の体を囲む。そして……

「変身！」

《バット！・エンジン！・フツハツハツハツ！》

そのパイプは私の体を包み込み、ドライバーから笑い声が聞こえると……

「マッドローグ！　ちゃんと僕の敵出きるじゃん♪」

私は、マッドローグになっていた。見た目はほとんどナイトローグの白と紫に塗
り替えたような感じだが、所々違うところがある。

「フハハハハッ！」《ガン！》

「グフツ！」

何故かわからない。力がみなぎる。よく分からない。でも倒したい。こい
つを倒したい。

倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒
したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒した
い倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒
したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい倒したい

「くそ！ くそ！くそ!!」

「グアアアアア!!!」

「嘘!？」

「あいつを素手で?」

マツドローグは強い！ ヘルギアスなんかよりも！ 誰よりも！ フハハハハッ！

そして砂ぼこりが晴れると

「やっぱり、ヘルギアスじゃあ持たないか・・・」《ガチャン》

ネビュラスチームガンとヘルギアスギアを投げ捨てている春一さんの姿があつた。

くくくくく

千冬視点

まさか、内海がああのドライバーを使いこなせるとは・・・東によると、地球外生命体にしかり使いこなせないはずだが？

「グアアアアア!!!」

「出る幕は無さそうだな・・・」

私はIS用の刀を持ちながらそう言う。それもそうだ。

内海がたつた三回殴っただけであの…未確認のISを爆散させたのだから…

「よし、これで馬鹿者の顔が拝めr…?!」

「やっぱり、ヘルギアスじゃあ持たないか…」《ガチヤン》

そこには、少し背が低い、一夏とほぼ瓜二つな姿…白髪で片眼が赤色だが解る…

「春…?」

其所には、変わり果てた姿の…愚弟、春一がいた

~~~~~

### 一夏視点

「春…?」

春一は昔から俺とにていると言われていた。そして、目の前にいる奴は、俺と顔は瓜二つ。だけど、髪は白色だし、目が片眼だけ赤色…

「ちよつとだけ見せようか♪」



「そんな起こるなよー、てか僕」《ガチャ》

そう言うのと、コウモリ男が持ってた銃を取り出して千冬姉に向ける。

「お前らの思っているような春一じゃないから！」

《コブラ!・スチームアタック!》

「千冬姉!」

くそっ!・・・あいつ、自分の姉を! しかも千冬姉を! あれ? でもなんで千冬

姉は無傷n!?

「大丈夫・・・です・・・か? 織斑・・・先生・・・」

「ああ大丈夫だ! でもお前らは?!」

それでも教師陣が、千冬姉を庇ってくれた・・・けど庇った先生達は・・・

「ださ! たった一撃でknockout?」

「そこまで落ちぶれたか! 春一! 愚弟の癖に!」

「はあ? なにぬかしんでんの?」

そう言うのと両手を広げて春一はこういう。

「今の僕は、難波、難波春一だ。以後お見知り置きを」

「何を言っている! お前は真正正銘、私の弟だろ!」

何を言ってるんだ・・・? あいつ

「愚弟なんだろう?! だから織斑って言う姓名は捨てたんだよ……僕も内海君に恨まれたくないしねw」

「どういうことだ?」

「だから……内海君の家族二人が死んだのは……ふたr「オモイダサセルナア!!」っ!?」《ガン!》

「!?」

内海!?

~~~~~

内海視点

倒したい……でもダメ……周りを……コワシチャウ……から……僕も内海君に恨まれたくないしねw」

なんだツテ……ナニオイタインダ……カレハ……まさか!?

~~~~~

「父さん!」

「パパ！」

《bat!》

「行ってくるよ・・・成明、秋名」

~~~~~

「ミサイル軌道に到達！ 直ちに除去を・・・なんだあれは!」

「白色のライダーシステム?!でも、ライダーシステムの構造ではない！ 内海さん！
気を付けて！」

『ああ・・・お前は何が目的だ!』

『・・・・・・・・』

『此処は危険だ、早く避難し《ガン!》・・・ウツ!』

『邪魔だ!』《ジャキン》

『グハツ!』

「ナイトローグの片翼が破損！ どうしますか!? 葛城博士!」

「ひとまず、ナイトローグの再装着を!」

「はい！ 内海さん！ 内海さん!? ダメです・・・無線が反応しません!!」

「父さん!」 「パパ!」

「不味い!」

「どうした!？」

「ナイトローグの……バットフルボトルが……抜かれました……」

「なんだと!？」

「内海さんが!!」

「……太平洋に……落ちました……」

「……」

「今すぐ探せ! トランスチームガンの影響で、まだいきてるかもしれない!」

「はい!」

「父さん……」

「パパ……うわあああん!」

~~~~~

「……ウツ!」

辞めて……クレ

《ガン!》「ウツ!」

「あんたのせいよ! あんたが織斑一夏を生かすから!」《ガン!》

「グフツ!」

「私達の言うとおりに、普通の I S でブリュンヒルデに成ろうとすれば良いのに!」《ガン!》

「ガハア!」

「あんなクズの偽物なんかを使うから! 男にも使えるやつを使ってるってばれたら、I S と女の評判が下がるでしょ!」《ガン!》

「グツ!・・・お兄ちゃんど・・・このリバーズは・・・クズじゃ・・・ない!・・・」

「はあ? I S じゃないんだからクズでしょ。たくつあの男、あんな老いぼれの前に殺しとけば良かった・・・って、済ました顔してんじや無いわよ!」《ガン!》

「ウツ!」

「恨むならあんたの兄貴を恨みな!」

「秋名!」

~~~~~

辞めろ……ヤメロ……もうこれ以上……

「オモイダサセルナア！」

「っ!？」

《《ガン!》》

「!?!？」

「ハザードレベル5を越えたか……まあお披露目会も終わる頃だし、めんどくさそうだから居なくなるよ……ciao！」

そう言い春一さんは消えた……

もう私も変身を解除してもいい……

でも……


~~~~~

### 氷室視点

「ようやく片付く・・・」

「これで終わりよ！」

「勝利の法則は、決まった！」

《クランクアップフィニッシュュ！》

《シングル！ シングルブレイク！》

《ready go！ ボルテックフィニッシュュ！》

俺と風、途中から来た葛城は、それぞれの必殺技をパチもんガーディアン達に放つ。

「オリヤア！」

「ふん！」

「ハアア！」

《ドカアーン！！》

終わったな・・・

「めんどくさそうだから居なくなるよ♪ c i a o」

「・・・・・・・・」

「じゃあ俺、束がうるさいので帰ります。」

「ああ、」

内海のところも終わったんだな……だが……

「……………」

何故内海は、変身解除しない？ 変身してればしてるほど負担は大きいはずなの

に……近づいて声をかけてみるか

「おい内海、こつちも終わったぞ」

「…………フフツ」

「どうした？」

「フハハハハッ！」《ガン！》

「グツ！」

「ちよつと！何、師匠に対して攻撃してんのよ！」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」《ガン！》

「ガハッ！」

「もつと…………モット戦カワセロオー！」

《♪♪♪♪♪♪♪♪》

不味い！必殺技が来る！

《ready go! エボルテックファイニッシュ!》

内海が羽を広げて飛び立ち、蹴りを入れてくる。

「グアアアアア!!」

《ciao!》

「ハハハッ、ハハハッ!」

俺は吹き飛ばされて意識が飛んだ……

~~~~~

一夏視点

なんなんだよ……

「ハハハッ、ハハハッ!」

どうしたんだよ内海……ん? あいつ何で千冬姉を見てんだ?

「オマエモ……オレヲクルシメルノカあー!」

「っ!?!」

不味い！… このままじゃ！

「シネエ！」

「やめろー！」

《ガン！》

「グアアアアアア！」

なんだよあれ…… たった一発で…… SEが残っているだけでも奇跡だ……
「アヒヤヒヤ！」

「このままじゃ…… 結局守れないのかよ…… 《ガチャ》…… ん？」

「これは……？」

春一の…… IS？ そう思い触れると、俺はよく分からない空間にいた。

「ここは？」

『貴方がマスターの兄さんですね』

「誰だ!？」

其所には、髪の毛が濃い黒色で目が白と薄い水色、服がギアの模様がある半分で別れた、白と薄い水色のパーカーを着た俺より若そうな男がいた。

『少しだけ力を貸します。』

「おい！話を聞け！」

『さようなら』

「おい！・・・はっ！」

気がつくと、元の場所に戻っていた。

そう思っていると、さつき春一が投げ捨てた歯車みたいなのが光ってるから手に取る。

「シネエ!!」

やべえ！ 千冬姉が！

「待てえ！」

「一夏!?!」

「俺が死んでも、千冬姉は殺させねえ！」

その時、不思議なことが起こった！ ヘルギアスギアと織斑一夏のI S、白式が融合したのだ。その姿は白式にヘルギアスの歯車の部分がついた状態。

「・・・ナニコレ？」

「内海・・・お前は俺が倒す！」

「アヒヤヒヤ！ ドケエ！ ソノオンナヲコロシテカラアイテシテヤル！」

「うるせえ！ さつさとくたばれ！」

「アヒヤヒヤ！ ソノオンナヲコロシテカラアイテシテヤル！」

「うるせえ！ さつきとくとたばれ！」

私ハ、ソノアイエスヲ殴ル ヤツ、フツ飛ブ 倒レル ソウダ、今マデノ怒リヲブツケヨウ

「オマへは、ワタシに.. ヒキヨウモノ.. とイッタヨナ？」《ガン！》

「グフツ！」

「タシカニワタシハヒキヨウモノダ！」《ガン！》

「グツ！」

「ジブンノツミヲ、ヒトニナスリツケタ！」《ガン！》

「ガア！」

「デモ... その原因を作ったのは、お前ら.. 愚姉弟 だあー！」《ガギン！》

「グアアアアア！」

ヤツ、マタフツトンダ、ケドマタクル

「俺はお前を止める... こい！ 雪片二型！」

「ブキヲモツタトコロデナンニナル？」

「うるせえ！ 零落白夜... 発動！」

「コイ！」

「うおおおお！」

「コンナノ《ガン!》グフツ！」

何デ？ ナンでウゴキガニブツタ？ 『やっぱりだめだ……』 クソ！ ドライ
バーのオカゲデヤットホンシンニナレタノニ……マタエンギノビビ……カ……

《バタツ!》

「内海！」

私は一夏さんの手の中で、意識を落とした。

第五話 内海の休日

内海視点

「此処は・・・何処だ？」

目を開けると、訳のわからない部屋にいた。白い空間で所々に白色と水色の歯車が浮いている。しかも、地面が畳でちゃぶ台がポツンと・・・

「此処は精神の床の間ですよ。」

「っ?!」

声が出た方に顔を向けると、其所にはヘルギアスを擬人化したような青年がいた。

もしや・・・

「あなたの思っているとうりだよ。此処はISとごく稀に会話できる空間とほぼ同じ・・・って作ったのは貴方かw」

「という事は、見た目で考えて貴方はヘルギアスですか。」

「当たり前！ という事で本題に入りますけど、どうでした？ マッドローグになって」

「どうもこうも、.. 最低で最高.. でした。」

そうだ、あれは暴走のようで少し違う。叫んだことも、行動も、全て私の本心と本音

だった……

「へえ。じゃあ、次マスターが襲つて来たときは、またマッドローグを使います？」

「……………」

そんなの……嫌に決まってる。本音を出せるのは気が楽だし、本心をさらけ出すと自分の膿がとれた気がした！しかし、罪無き人達も傷付けてしまいそうになった……自分理性だけは、失いたくない……

「その考え方で大丈夫です。さあ、起きて。」

~~~~~

「はっ！」

起きると其処は私の部屋だった。

「ようやく起きたか。(金尾ボイス)」

「エボ r、石動先生……」

「ここでは二人きりだからエボルトでいいぞ。……色々聞きたいところだが、今日しつかり休んで、明日は何処かで気分転換してこい。外出許可は取っておいたから。」

「そうか……明日は休日か。」

「そうします。」

「あつ、そうだ。兄貴（笑）の喫茶店に来てやってくれよ。マジで客が少ないらしい。」  
「貴方が勝手に石動さんの体に乗っ取るからでしょ。SNSでコーヒーがこの世のものとは思えないとか書かれてましたよ。」

「そんなに不味いか？ 不味いのは認めるが。」

「不味いですよ。特に何シタ？とかw」

「笑うなよ……気にしてるんだから……」

~~~~~

休日

「ここ……でしたよね？」

内海 da ☆。 今日私は、難波会長のおすすめ、五反田食堂にやって来ましたあゝ

(棒)

《ガラガラガラ》

「すいません、今日は店やってないって成明さん!？」

「えっ? 内海?!」

「げっ!」

何でこいつゲフンゲフン。 一夏さんがいるんですか……

~~~~~

一夏視点

「あつ! デートか?」

「違います!」

いやいや、蘭。 着替えてる時点でどこかには出掛けるだろう? 友達と遊びにでも

いくのか?

「お前って学校でもその調子なんだろうな〜」

「んっ、なんのことだよ?」

「何でもねえよ、鈴木も気の毒に・・・」

なんだよ弾まで・・・もしかして、俺がIS学園に行ってる間に、日本の制度が  
変わって《ガラガラガラ》誰か来たのか?

「すいません、今日は店やってないって成明さん!」

「えっ?内海?!」

マジか!?

~~~~~

内海視点

「そうですか・・・じゃあ帰ります。」

「待って待って!何で帰るんだよ。 飯食ってけよ!」

「いやいや、店が閉店しているのだから違う店に行くのが一般常識な気がするのです
が・・・?」

よし帰ろう。 女もいるし、今すぐ帰ろう。 っつてその女が近づいてきてる!?! 早く

「帰えr「ちよつと!」あつ……オワタ＼(〇〇)／

「一夏さんの知り合いなら、私達拒まないから、食べていけばいいじゃん!」

「馬鹿! すいません!うちの妹が……」

「馬鹿兄! なにペコペコしてんのよ!」

早く帰りたい……

「この人、前に来たろ!」

「それがなに?」

「難波重工の、会長の秘書だよ!」

「だかr……ええええええ!? そう言えば、会長の肩揉んでた!」

いや、思い出してくれて有り難いんですが、何で第一印象が肩揉み何ですか……(……)

「すつ、すいません!」

「いや、謝ることはn「そうだ、謝ることないぞ蘭」……それ私の台詞なんです……」

「おい! 一夏止めろ! この店の評判が!」

「別に反論する訳じゃねえよ弾。 内海、一緒に飯食おうぜ!」

「(。ロ。)」

やばい、今ものすごく内海キックを喰らわしたい……嬉しさ半分、台詞返せ半分で消滅チップのスイッチを押ししたい。 まあ押したら消えるのは氷室さんなだけだ。

「いや、この店の迷惑に口ほら！ こっち来いよ！」《グイ》って分かりましたからスーツ引つ張らないで！」

「ご注文は……」

「そんなに固くならないで下さい。何でもいいですから。」

「わっ、わかりました！」

難波会長つてやつぱりすごいなあー(棒) まあ、中身はただ難波チルドレンとか表面きで言つて裏で幼女見て喜んでる変態ですけどね……あれこそ一方アクセルリッター幼女ですよ。いや、一方通報かな？

『よっしやアアア！』

お兄さん張り切ってますね……

「内海、お前よくここ来んのか？」

「別に……初めてです。」

「へえ、じゃあ何でここ選んだんだ？」

「難波会長がよく褒めてたからです。『このたい焼きは絶品だ』って」

「ふうん……つてここたい焼きもあんの?!」

「裏メニューらしいです。この店長さんと知り合いらしくて、よく作つて貰つてるそうですよ。」

「この店……そんなもんなまで作れるんだな。蘭は知ってたのか？」

「いえ、私難波会長が食べ終わつたときに学校から帰つて来たので、作つてた事は知りませんでした……。あつ！ でも『重さんが来るから』つて朝から『アルティメットフォース！ スペシャルターボ！』つて焼く練習してたので、それですかね？」

「へ、へえ〜」

「すごいですねこの店長さん。」

「昔は、何処かの屋台で変なギアを付けてたい焼き焼いてたらしいですしね。しかも速いし上手いで大繁盛してたらしいです。」

それ完全になりたい焼き名人○ルティ○ットフォームじゃないですか……

~~~~~

弾視点

「や……や……」

どうしよう・・・親父がいねえから食材の使い方よくわかんねえし、しかも客に出す材料が・・・

・海老×一尾　・キャベツ×1/5　・まぐろぶつ×1パック・米×1合　・ジャガイモ×1個・ひき肉×1パック　・卵×1　・小麦粉×1/3　・パン粉×1袋　・鯖×半分

・油揚げ×半分　・わかめ×1パック

これじゃ材料以外のオーダー来たら作れねえよ！　終わった・・・

「何でもいいですから・・・」

んっ？　今なんでも良いって言ったよね？

「よっしゃアアア！」

首の皮一枚繋がった！有り合わせでどうにかするぞ！

く数分後く

「ハア、ハア。　どうにかなったぞ！」

弾特製定食内容

・海老フライ

・コロッケ（キャベツの千切り）

・鯖の焼き

・まぐろのぶつ

・米

・味噌汁

「お待たせしました！」

頼む！口にあってくれ！

~~~~~

内海視点

「お待たせしました！」

久しぶりにまともなご飯を見た気がする……最近、頭を使うために甘いものしか食べてなかったから、ありがたい。

「いただきます。」

まずはコロッケから

《ザクツ！》

熱っ！……でも、ジャガイモがひき肉の肉汁によって、柔らかくて美味しい。

熱いけど。

次は、まぐろのぶつ。《パク!》 山葵を付けて刺身醤油で……おっ! トロがまじってた。

ヤバイ! 楽しくなってきた。次は、海老フライだ。

《ザクツ!》

これもコロツケと同じようにサクサクだ! しかも海老の身が固くなく、プリっ!とじてて柔らかい! これも美味しい!

ここで一回味噌汁を飲もう……《ズズズ》っ!? 味噌汁なのに味噌が濃くない! 出汁が効いてて、健康にも気を使ってくれている!? なんなんだこの料理は!?

最後は鯖か……大根おろしに醤油をかけて、さつぱりと《パク!》っ!? 身が焼きすぎてもいなく、生焼けでもない。なのに魚類特有の油が噛めば噛むほど出てきて、大根おろしがさつぱりとしつこくなくしてくれている……久しぶりにだからってこんなの食べさせられたら

「……」《ポタツポタツ》

「どうしたんですか成明さん!？」

「口に合わなかったんじゃないのお兄!？」

感動するに……決まってるじゃ……ないか……

「いえ・・・ただ、この料理が・・・想像以上に美味しくて・・・（；o；）」《ウルウル》

「えっ!?!」

「ほら! やっぱりこの料理は旨いだろ内海!」

「はい! 一夏さん!」

《パクパク! ガツガツ! モキユモキユ! ゴツクン!》

「良かったな弾! じっくり甘いものかカロリーメイトしか食って無かった内海が旨
いってよ!」

「良かったね! お兄!」

「マジっすか?! そんなに俺の料理が旨かったんですか?!」

「はい! 美味しかったです!!」

とりあえず、勢いにまかせて完食してしまっただが・・・全然飽きなかった・・・難波重工の食堂とは大違いだ。まず女性が作った料理なんて何が入っているかわからないからな!

「実は、ここの店長さんの料理が旨いと聞いていたので心配だったのですが、食べて正解でした。逆に一夏さんに止められて良かったです。」

「そうですか・・・まあ、当たり前のように親父の方が飯うまいんですけどね」

これくらいのもりようりだったらこれくらい出せる!

《バン!》

「ご馳走様でした。ありがとうございます。」

「ありがとうございます。弾兄!」

「諭吉が五枚も!?!」

「流石にただの定食で五万円は・・・」

「内海、大丈夫なのか?こんなにだして・・・」

「大丈夫ですよ。これだけ美味しかったんだから、これくらい払って当然です。それじゃあ。」

《ガラガラガラ》

・・・・・・また来よう。

~~~~~

na s u t i c a

来てしまった・・・まあいいや。食後の一杯として。惣一さんのコーヒ―は美味しい・・・

《ガランガラン》

「いらつしやい！おつ！来たな内海君！」

「はい。」

この人が石動惣一さん。数年前に宇宙飛行士の任務で火星に行つてからろくなことの無かつた人だ。今はエボルトこと惣次さんと何故か仲良く暮らしている。

「コーヒ―一つ」

「OK！」

「やっぱり客来ませんね・・・」

「そうなんだよ・・・あいつの性で！・・・でも、あいつ何故か、バイト中毒になつて働きまくつてるから別に生活に問題はないんだけどな」

「そうなんですか・・・」

エボルトさん、何があつたんだ・・・

「ほい！ナニシタた。何シタ？じゃないぞ。ナニシタだ。」

「紛らわしいですね・・・まあいつも道理美味しいです。」

「そうだよな！ 何で客全然来ないんだろ？・・・あくあ、女子高生が数人位で来てくれないかな〜！」

「流石にそれはな i 《ガランガラン》」「内海！」「内海君！」「お兄様！」・・・前言撤回ですな・・・」

「はいはい、望み通りの女子高生が数人来ましたよ・・・右から簪さん、楯無さん、セシリアさん、本音さん、虚さん・・・何故来た!? 何故私の名前を呼んだ?!」

「ヤッホー♪ 来たよウツミン！♪」

「こら本音、喫茶店なんだからあんまり騒がない。」

「何故ここが・・・」

《ヒョコ!》

「すまない内海・・・（金尾ボイス）」

あつ・・・（察し）



~~~~~

前日

エボルト視点

「よし、内海に好意を持つてる奴等にはちゃんと諦めさせたぞ」

俺、惣次ことエボルトさんは休日内海をゆつくりさせるため内海を遊びに誘おうとしてたりしてた奴等にはちゃんと「内海はちゃんと休まないといけないから無理をさせるな」って警告しておいた。あれっ？何であの姉妹とセシリアお嬢さんがはしつてきてるんだ？

「石動先生……私達に嘘をつきましたわね？」

「何でだ？俺が嘘をつく理由は無いだろ？」

「お姉ちゃんが内海君の外出許可を石動先生が取ってたって。」

「あれ、石動先生、内海君には無理をさせちゃいけないのに、一人で出かけさせるんですかあ？」

「……………」

やばい、どうしよう……内海の知り合いだから消すことも出来ない……

「しかも、貴方地球外生命体ですよね？エボルトでしたっけ？これがばれたら先生

「どちなつちやうのかなあー」

「!?!?!」

「!?!?!」 《冷や汗だばー》

~~~~~

内海 side

「それで、とりあえず行かないと言ってもなんとなく来そうなの nasutica に案内したと……」

「悪かった……」

「まあ、エボルトさんのことは口外してないようですし、貴方は悪くないですよ。」

「やっぱり内海君は甘 i 「でももし口外されていたら私は更識家と縁を切るつもりでしたか」……えっ!?!」

「いや、エボルトさんは私の命の恩人なので、ここにいれなくするようなことをしたら私は、難波重工の全勢力を使って更識家を潰しにかかってましたが、安心しました。」

「・・・・・・・・・・」《冷や汗だら〜》

「お嬢様・・・・・・・・」

「姉さん・・・・・・・・」

ちよつとからかつてやろうかな

「まあ、楯無さんとはしばらく話しませんけど」

「えっ?! ( ; ∇ ° ) ! ?」

「あれっ? 今楯無さんの声がした気がします、気のせいですが、気のせいですかね?」

「内海君・・・・・・・・ごめん」

「石動さん、コーヒーもう一杯・・・・って倒れてる?! しっかりしてください!」

「・・・・・・・・」《グスン》

「ドンマイなんだよお嬢様・・・・・・・・♪」

~~~~~

数分後

「これ夢じゃ無いよね？」

「はい」「そうだな」

「うちの店に、客が？」

「「まあそういうことです（わ）」」

「……………」

石動さん？ まさかあまりにショック「やったああああ！念願の客だく——！！！！」……
逆だった

「さあさん皆さん、席に座って下さい！ コーヒー一杯サービスします」

「いや……………ただでと言うのは……………」

「少々気が引けますの……………ただの客ですのに」

流星に虚さんもセシリアさんもひいてますよ……………

「そうだぞ兄貴（笑）たかが客が来たくらいでh「誰のせいだ！」《ゴツン！》そげぶ！」
《ガランガラン》

「いらつしやい」

「ヒヤッホウ！また客だ！」

「一夏さん？」

「おう、内海。たまにはコーヒーをな、」

~~~~~

数分後

結構楽しんだし（ほとんど楯無のいじり）そろそろ帰ろうかな・・案外一夏さんもいい人だったし。やっぱりコーヒーを交えるとちがう《ガランガラン》・・えっ？

「いちっしや・・い？」

「?!?!」

na s u t i c a の中にいる全員が見たものは・・・

「このコーヒー以外と美味しいんですよ」

「わかったから引つ張んなって蘭」

さっきの食堂の蘭さんと、もう一人の一夏さん、そうもう一人の一夏がいた。大事なことだから二回いった。

「ああああああああ?!?!」

「俺が二人？」

何ですかこれ?! はっ! まさか私の好きなカ〇トのワームが?! . . . . . つて、それはないか

「オリムーが二人つてどーゆーことだー?♪」

「まさか双子？」

「ドツペルゲンガーかも。それだつたらあのヒーローが . . .」

皆さんも流石に驚きますよね . . . . . 後、簪さんそれはないと思つていた方がいいですよ。

「ここまで顔を似せれるとなると . . . お前また . . .」

「いや! もうやんない! 流石にもうやんないから!」

「やっぱり地球外生命体として国に報告した方が . . . .」

「だから俺じゃないって!」

こっちはこつちでエボルトさんがとぼつちり受けてますし! ああもう! 誰かどうかし! 「なに言つてるんですか? 皆さん」 e . . えっ?

「蘭さん、わかるんですか？」

「わかるもなにも全然違いますよ。」

「?????」  
「?????」  
「?????」

「蘭、俺が本物だよな？」

「さつきまで一緒にいたんだから俺が本物だろ？ 蘭」

「おお、これは面白そうだ！（金尾ボイス）」

「他人に見分けがつくってことは、お前の地球外パワー（笑）じゃないもんな」

「チッ！」

蘭さんすごいですね．．．．楯無さんは、なに舌打ちしてんですか。 そんなにエポルトさんを葬りたいんですか？

「その座ってる人の、何処が一夏さんなんですか？」

「なに言ってるんだよ．．．俺が」

「じゃあ、貴方が一夏さんだつて言うなら、何で腕のISが着いてないんですか？」

「っ??」

「?!?!」

本当だ、腕に白式の待機状態のガンレットがついてない!? 大事な所を見落としていた．．．．

「こりゃ一本とられたね．．．」

「早くその化けの皮を剥いでください！」

「わかったわかった。．．．こうやって、ウィッグをとって、カラコンを外せば．．．」

「「?!?!?」」

「やっぱり……」

特殊メイクにしてはクオリティが高いと思つたら、白い髪に、片眼が赤い……完全に……

「あつという間に難波春一ですw」

「「ゑゑゑ!!」」

「えっ? 春一くん?!

「やっぱり兄さんloveは相変わらずだね! 蘭ちゃん」

「でもなんで難波?」

「それは聞かないお約束♪ じゃあもう帰るわ。マスター! 美味しかったよ!」《諭吉

パサツ!》

「「……」」

流石にちよつと重いですね……それに比べてこの人たちは……

「待つて! コーヒー一杯で一万円?!

「今日焼き肉いかね? 兄貴(笑)」

「いいね! 美空も誘つて行こう!」



「どうする？ キ〇グ？ すた〇な？」

「いや！ここはあえて〇角とか、安〇亭とか！」

この人たちは金か?! 金なのか？ 今、無性にエボルドライバーを使いたいんですが……《ガチャ》

「内海さん?!」

「内海君！ 気持ちはわかるけどおさえて！」

「お兄様！ だめです！」

「ウツミンダメだよー♪」

『ダメよーダメダメ！』

「内海k「じゃあもう帰りますか」……ρ(……)」

~~~~~

夜

今日は楽しかったナー。でもさつきとギアスのデータからブロスを完成させないと、鷲尾兄弟の意味も無くなってしまいますし……《コンコン》……

「はい。あつ、セシリアさん。どうかしましたか?」

「あつ、あのく今度学年トーナメントがありますわよね?」

「はい、ありますね……」

「そのトーナメントで私が優勝したらつ……つっ／＼」

「ん?」

「デート……付き合っつて貰いますからね!o(ゝゝ*)」

「へっ?」

これは……半分愛の告白じゃないですか……まあ何かあったら私が勝てばいいし……

「いいですよ。その条件」

「本当ですか!?!」

「はい。」

~~~~~

本音 side

「ニューズどころか！、大スクープだよ！♪」

「これはすごいぞおー！ オリムーと言いつツミンといい、二人とも幸福者だなあ」  
 「さつきも織斑君も篠ノ之さんに告白されてたし！」

「これは凄いことになりそう！」

えへへ！ みんなに知らせちゃおう♪

~~~~~

翌日

内海 side

「「ギわびさわびわ」」

おや、教室の中が騒がしいですね．．．．女性同士の話だと、乱入したときめんど

くさいので、聞き耳を立ててみますか

『ねえ、聞いた聞いた?』

『それって、この間のI Sのこと?』

『あれは、実験中の機体が暴走したって話でしょ!』

へえー、あのI Sと言う風に説明されてたんですか……あれ、ヘルギアスハドウナツタノカナ?

『じゃなくて、今月のトーナメントで勝つと、』

『織斑君と付き合うか、内海君とデートするか選べるんだって!』

『そうなの?!』

『まじ?!』

『うわあーどうしよう!』

(; ; ∇) ? えつ? …… そんな話聞いてないんですけど…… てか、皆私
が女嫌いだって知ってるでしょ! くそつ! 誰がこんな噂!

『なんか、話が歪んで広がってる……』

『あんだ、また適当なこと言ったんじゃないの?』

『うえー、そんな事ないと思うけどな〜♪?』

貴方のせいですかあー!!! はっ! まさか主が侮辱された腹いせに? …… つてそれ

はないですよね

「おい、内海」

「何ですか？織斑先生」

「もう席に着け。織斑でさえ席に着いているぞ。」

なに!? まさかあの人に出し抜かれるとは！（自分が聞き耳を立ててた性）

~~~~~

「今日はなんと、転校生が二人も来ています！」

「急急?!」

「「わいわいガヤガヤ」」

ういーん

「っ?!」

【そこで皆が目にした者とは！ このあとすぐ！】

【次回に続く】

## 第六話 金と銀の p a t s i e s

## 三人称視点

「シャルル・デュノアです。宜しくお願ひします」

「男？」

男、そう男だったのだ

「はい、同じ境遇の方がいると聞いて、本国から転入を・・・」

「「キヤーーーーー！」」

「三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かったー！」

「男子が一杯・・・グヘヘ」

数人は喜び、何人かは発○していたが、一人全く喜んでいない者がいた。

それは

「(女じゃん・・・)」

~~~~~

内海視点

げっ！ また女が増えるんですか？

「シャルル・デュノアです。宜しくお願ひします」

「男？」

いや、女でしょ

「はい、同じ境遇の方がいると聞いて、本国から転入を・・・」

「「キヤーーーーーー！！」」

うるさいなあーと思ひながら内海は耳を塞ぎます

「三人目の男子！」

女でしょ

「しかもうちのクラス！」

良かったですね！ 女ですけど

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

確かに守ってあげたくなる系ですね！ 女ですけど

「地球に生まれて良かったー！」

良かったですね（二回目） 女ですけど（ry

「男子が一杯・・・グヘヘ」

確かに一杯いますね！ これは女で（ry

「良かったな内海！ 仲間が増えたぞ！」

はいはい、そうですね。勝手に喜んで下さい。女（ry

「今日はもう一人ドイツから来た人がいますからね、って織斑先生、ポーデヴィツヒさんは？」

「それなんだがな・・・」

ん？ どうしたんだ織斑先生。 口を濁らせて・・・って、ポーデヴィツヒつても
しやー！

《ゴゴゴゴゴ！》

「なんか飛んできてる!?!」

「このままじゃ校舎にぶつかるとよ！」

あの黒い機体、ドイツ、ポーデヴィツヒ・・・

「待って！ あれこの教室に向かってない？」

「あれ I S だよ！　　つていつてる暇ないよ！」

《ゴゴゴゴゴ！》

「不味い！こつちに来る!!」

「まだ死にたくないよー!!」

「神は言っている。　　ここで死ぬ定め（ry）」

あの感じだと窓ガラスに突っ込みますね。でも生徒がない場所だから大丈夫だ《パリン！》…… I S の制御は完璧ですけど、なんでどこぞのアメコミのアイロンマンの真似してるんですか……貴女ドイツ人でしょ

「なんなんですか!?!この人！」

「なんなんだとは酷いだろ。　　私もこのクラスの一員なのだから」

「「えっ?（*・皿・）?」」

「はあく、だからやめろと言ったんだらウラ。　　内海、頼む。」

「……はい。」

《カチャカチャ!》（振るの下手）

「「「可愛い／＼／＼」」」

私はネビュラスチームガンにウオッチフルボトルを挿入して、窓ガラスに撃つ

《フルボトル！　ファンキーアタック!》

「!?!?」

なんとと言う事でしょう。 さつきまで粉々だった窓ガラスが一瞬で新品も同然。

「ラウラ、自己紹介をしろ」

「はい！ 教官！」（IS解除）

「ここでは織斑先生と呼べ！」

「了解しました！」

完全に流しましたよね？ ラウラさん。 今完全に流しましたよね？

「ラウラ・ポーデヴィツヒだ。」

「……」

あれ？ この光景、何処かで

「以上、なのだが？」

「ずてーん！」

やつ……ぱり……かつ！ グハア！

「じゃあ織斑、クラス長としてあいさつをしろ」

「は、はい！ 俺は織斑一k「黙れ、まるでダメな織斑弟、略してマダオ。」aつて、そんな言い方ねえだろ！せめて」

バッサリ言いますね。 流石 少佐

「こらラウラ、先生の前でそんな言葉を吐くな。」

「じゃあ、デユノアさんはそこ。ポーデヴィツヒさんはその席に座って下さい。」

「はい」

二人の内、片方が同期で助かった。どちらも知らない女だったらホントにエポルドライバーで世界を変えてやろうかと思いましたがよ（小並感）

~~~~~

シャルル視点

「三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かったー！」

「男子が一杯・・・グヘヘ」

（\*・▽・）ノやあ。僕は転校生のデユノア。今訳あつてIS学園に入学することになったんだけど・・・良かったあこれならバレなそうだ。バレたらどうなることやら・・・でも

「( . . . )」

スツゴいみてる！ スツゴいみてるよあのメガネの人！もしかしてバレちゃった？ いや、完全な変装な筈だからバレることは . . .

「良かったな内海！仲間が増えたぞ！」

「. . . . .」

へえ。あのサイボーグみたいなメガネ、内海君つて言うんだ。それならあの活発的な子が織斑ダイゲツト一夏君か . . . .

「今日はもう一人ドイツから来た人がいますからね、つて織斑先生、ポーデヴィツヒさんは？」

「それなんだがな . . . . .」

そう言えば、もう一人転校生が来るつて聞いてたな . . .

《ゴゴゴゴ！》

「なんか飛んできてる!?!」

「このままじゃ校舎にぶつかるとよ！」

あれ？ 確かあれドイツのIS欄で見たことあるような . . .

「待って！あれこの教室に向かつてない？」

「あれISだよ！つていつてる暇ないよ！」

《ゴゴゴゴゴ!》

「不味い!こつちに来る!!」

「まだ死にたくないよー!」

「神は言っている。ここで死ぬ定め ( r y )」

任務も遂行してないのに私死んじやうのかな．．．まあいい y 《バリン!》 a ．．．  
あれっ? 無事だ

「なんなんですか!?!この人!」

「なんなんだとは酷いだろ。私もこのクラスの一員なのだから」

まさか、二人目の転校生って．．．

「はあく、だからやめろと言ったんだラウラ。内海、頼む。」

えっ? ( ; ∇ ) ? 織斑先生聞いてたの?

「．．．．．はい。」

《カチャカチャ!》(振るの下手)

彼、なにしようとしてるの? あれ、見た目的には小さいボトルと塗料吹きにしかみ

えないんだけど．．．

《フルボトル! ファンキーアタック!》

「!?!?!」  
「!?!?!」

何あれ!? どういう事!? 何が起きたの! Σ (? □ ? ;)

「ラウラ、自己紹介をしろ」

「はい! 教官!」(IS解除)

「ここでは織斑先生と呼べ!」

「了解しました!」

今、完全に流しましたよね?

「ラウラ・ポーデヴィツヒだ。」

「「「「「「「「「」」」」」」」」」

どんな自己紹介するのかなo (^o^ )o

「以上、なのだが?」

「ずてーん!」

へっ? ( ; ∇ ) ?

「じゃあ織斑、クラス長としてあいさつをしろ」

「は、はい! 俺は織斑一k「黙れ、まるでダメな織斑弟、略してマダオ。」aつて、そんな言い方ねえだろ!」

僕、このクラスでやって行けるかな・・・

~~~~~

ラウラ視点

私はラウラ・ポーデヴィツヒ少佐だ。 現在訳あつてISでIS学園まで向かつてい
る。勿論、飛行して

『隊長。状態はどうですか？』

彼女は、私の信頼しているシユヴァルツェ・ハーゼの副隊長クラリツサ・ハルフォー
フだ。彼女は日本にとても詳しいので、助言を貰ったりしているのだが……

「クラリツサ、聞きたいことがあるのだが……」

『何ですか隊長』

「流石に、ISで教室の窓を破つて入るのはどうかと思うのだが……」

『隊長、確かに貴女の選択は正しいかもしれない。しかし、日本人はこういうヒーロー
のような行為が非常に好きなのもありますが、転校というものは在校生よりも印象が薄
れてしまうので、こういう強い印象を与えることをしないと後々辛いことになるので
す。』

「強い印象を与えないとどうなるんだ？」

『回りの環境に馴染めず、話し掛けても貰えず、話し掛ける勇氣も持てなくなり、友達が出来なくなる現象。 通称「ぼっち」という、とても悲しい現象が起こりうる可能性があります』

「なんだと……そんな恐ろしい現象が有るとは……」

『それに、窓を破つたのに怪我人が一人もでないとなれば、隊長のISの操作技術の提示にも繋がりますし。』

『流石だわ！お姉様！』

『そんなところまで計算するとは！』

『やつぱりアニメやラノベの知識は本物なのね！』

シユヴァルツェ・ハーゼの隊員はクラリツサに夢中だから、指示するのも楽なんだろうな……

「クラリツサ、そろそろIS学園1-1の教室に到着する」

『了解しました。 隊長、忘れてませんよね？あの着陸方法を』

「ああ、何度もみてイメージトレーニングをしていたからな」

『あと、愛しの内海様は置いといて、もう一人の男性操縦者の織斑一夏には気を付けて下さい。』

「ああ、わかつている。乙女の純情?とやらを叩き潰す者は、教官の弟であろうと私が倒す」

~~~~~

今に至る

千冬視点

全く・・・うちのクラスにはバカしか集まらないのか・・・

「織斑先生!質問があります!」

「なんだ?」

「さっきのポーデヴィツヒさんと、内海君も入学日に先生の事を教官と呼んでいましたが、何か関係があるんですか?」

そんなことか・・・

「内海とポーデヴィツヒは、私が昔ドイツで教官をやっていた時の教え子だ。」

「そうなんですか?!」

「その時の内海君とポーデヴィツヒさんの印象はどんな感じでしたか?」

~~~~~

内海の場合

「「えい！ やあー!!」」

「よしつ、そこまで!.....んっ?」

《ピッピッピッピッピッピッ》

「内海、何をやってる。訓練中だぞ」

「ラウラさんの新しい I S の開発中です。あのままでは彼女の体と才能が台無しです。」

《ピッピッピッピッピッピッ》

「今は訓練中だ、そのタブレットは私が預かる。」

《パチン!》

「このタブレットに手を出したら、

只ではすみませんよ?

~~~~~

ラウラの場合

「フツ、フツ、ハっ！」

「そこまで！ ラウラ、今日はやけに体が軽そうだな。何かしたのか？」

「いえ、ISなら内海に調整してもらいましたが……」

「そうか……しかし、よくここまで来たな。前とは面構えが違う。」

「それは、教官のお陰です！ 教官がいなければ私は、只の女でした。」

「よし、飯でも食いに行くか。金は私が払う」

「はい！」

~~~~~

「……ラウラは、私の言うことを忠実に守っていた。内海はその時から、ISの制作に夢中だった。」

「へえ〜」

「よし、次の授業はISの搭乗訓練だ。スーツに着替えてグラウンドに集まるように」

「「はあーいーい！」」

次回！ 髭復活